

247号

あこら上越＋あこら新宿編



# 地方政治と女性



— AGORAZEIN —

## 女性と政治・平和・因習

——本音でしなやかに、上越からの声——

小山田房子／黒岩秩子／神林タズ／斎藤千代／斎藤良江／鈴木勢子  
南雲和子／古川和代／古川美由紀／森沢朋子／山本卓子／横溝敏子

◆地方から政治を変えよう

佐藤ひろこ

◆分権時代と地方議員への期待

富野暉一郎

◆地方議員が果たす政治改革

石川 真澄

地方から政治を変えよう 佐藤ひろこ 1

AGORAZEIN

女性と政治・平和・因習——本音でしなやかに、上越からの声——

小山田房子／黒岩秩子／神林タズ／斎藤千代／斎藤良江／鈴木勢子 2

南雲和子／古川和代／古川美由紀／森沢朋子／山本卓子／横溝敏子

# 地方政治と女性・市民

分権時代と地方議員への期待 富野暉一郎

虹と縁に期待するもの——地方議員が果たす政治改革 石川真澄 39

TOPICS 新ガイドラインに女性たちが反対／最高裁が住民票の非嫡出子記載取り消し請求却下ほか 51

集会から 戦後フェミニズムの流れとこれから／女性議員ゼロ議会をなくそう リレーフォーラム in 新潟ほか 54

気になる英語 ゴー・ザ・ディスタンス 奥川 睦 56

めじやーなりすとのめ 女性記者の使命 坂東千恵子 58

意見／異見 女性審議委員は「壁の花」？ かとうひろこ 60

沖縄から あくまで軍事基地の県内移設に反対しよう／基地はいらない御万人ネットほか 62

阪神から 今も昨日のように——阪神からの報告／支援金電話相談千七百件にのぼる ほか 65

新工業国と呼ばれるマレーシアの女たちII サンディ・サカモト 68

あごら読書室

妻の決心・夫の腐心／地方から政治を変える

女ひとり地方議員に春一番／本ものの地方分権・地方自治

81

語りかけたいあなたへ19 アメリカという国 大里知子 84

資料 女性に対する時間外及び休日労働並びに深夜業の規制の廃止を定めた  
労基法改正部分の施行を延期する立法措置をもとめる意見書

日本弁護士連合会 86

# 地方から政治を変えよう

佐藤ひろこ

「私は無所属です。数の力ではなく、議論の力で政治を変えたいと思います」と、街頭演説している  
と、「そうは言っても、数の力がなければ何もできないでしょう」と言ってくる人が時々います。しかし、数  
が政治の力だと主張する人たちが、政治で一番大切な議論をおざなりにし、政治をだめにしてきました。  
議会は、多様な考えや立場の人たちが議論を積み重ね政策を作り上げていく、民主主義の拠点である  
べきです。全国の自治体に、少数派と言われながらも、市民とともに政策提案をし、議会で議論をまき  
起こす議員が出てきました。そんな議員と市民が声をかけ合い、この四月の統一地方選挙に〈虹と緑の  
500人リスト〉を掲げます。

「虹」は、多様性と個性を尊重した連携と協働を大切にする気持ちを表し、「緑」は、自然環境と共存  
した経済社会への転換という私たちの希望を表現しています。このリストは政党ではありません。地方  
から政治を変えるために、自治を大切にし議論をしていく議員をサポートするために、〈地方議員政策情  
報センター〉の設立を目指します。リストの半分近くは女性です。

「政党や利益集団の拘束をうけず、自らの責任で判断する」「利権を拒否し、自治体行政のチェック、  
条例、政策作りの担い手としての責任を自覚し、行動する」「自治体の範囲に縛られず、全国的、または  
国際的に連携して活動する」「住民自治・市民参加の確立のために市民への情報の提供に努め、市民とと  
もに考え行動する」「市民と議員との対等のパートナーシップを打ち立てる」。これが、リスト参加者の  
共通のスタイルです。このような自立した議員と、政治の変革を願い自ら行動する市民が協働し、活発  
な議論と民主的な手続きを通じ、最も身近な政府である地方自治体を直接に運営することで、新しい政  
治をつくることができると考えます。私も、一人ひとりの市民の思いや痛みを胸にきき、政治を市民  
の手に取り戻す一歩を、皆さんとともに踏み出します。

# 女性と政治・平和・因習

## 一本音でしなやかに 上越からの声

### 〈出席者〉

小山田房子(三和村) 黒岩 秩子(大和町) 神林 タズ(上越市)  
 斎藤 千代(東京) 斎藤 良江(上越市) 鈴木 勢子(青海町)  
 南雲 和子(上越市) 古川 和代(上越市) 古川美由紀(上越市)  
 森沢 朋子(上越市) 山本 卓子(上越市) 横溝 敏子(上越市)

〈ウーマン・カレッジ出会いの会〉発足五周年の記念講演会「戦後フェミニズムとこれから」を、斎藤千代さんを上越市に迎えて開催しました。

講演会終了後、有志で雪の温泉地に一泊して交流会を持ちました。その雑談の一部をテーマ別にまとめてみましたら、結構おもしろい内容になりましたので、地方からの発信の一つとしてお目にかけます。テープ起こしは、〈あごろ〉新会員の金子裕美子さん(糸魚川)です。(あごろ上越・鈴木勢子)



前列左から 斎藤(良)、南雲、斎藤(千)、鈴木、古川(和)  
 2列目 横溝、小山田、黒岩、古川(美)、森沢  
 3列目 山本、神林  
 (1999年1月23日新潟県中頸城郡三和村「米本陣」で)

## 女性と政治

黒岩 女の問題については、七〇年代のフェミニズム運動が始まった時からいろいろな関わりをもっていました。七年の国際婦人年をきっかけにして行動する女たちの会というのができて、はじめからそこに入っていたものですから、東京でやった合宿なんかにも出て行ったりして、ついこの間まで「行動する女たちの会」の会報をずーっと読んでいました。それもとうとう無くなりました。

当時、女という名前が入っているものは何でもとったんです。だから『わたしは女』も『女・エロス』も全部あるし、女と入っているものは、本でもなんでも買ったんですよ。『あーら』をとらなかつたのは、名前の中に女というのが入っていなかつたからだと思います。あの頃家事労働みたいなものを、どうして女がしなければいけないんだというところがすごくあつて、たまたま浦佐に引越して来たときに、一年間専業主婦をやっちゃったんですよ。その専業主婦の一年間に、すっかり夫は家事をやらないくせがついてしまったものだから、それをしつけるのにだいぶ手間

取りまして、東京に行つて、そういう集会に参加したりとか、そういう本を読んだりとかしながら、夫と闘つてきたというか。それが夫婦だったんですね。

私は子どもが男と女のコンビで三組あるんですよ。末っ子は二十三歳で、その下にまたエキストラができて（七人目、それが十八歳にこないだなつたんです。男の子と女の子というのはいくら同じに育てても、かなり小さいうちから男は攻撃的だし、女には攻撃性というのは少ないなあと思つていたんですよ。女が政策決定する場所とか、いろんな所のトップだとかに、もつともつと参画していったならば、そういう攻撃性というよりは連帯というところで、いろんなことがやつていけるんじゃないかなあと思います。

## 保守的な地域で女が議員に立つていく

黒岩 鈴木勢子さんなんか随分早くて、今何期目？ 三期目？ 四期目？ 五期目？

鈴木 まだ二期目ですよ。

黒岩 えー、二期目！ えー、本当！（笑）

鈴木 随分ベテランみたいだったでしょ。卓夫さんに、マ

イクこう持つてとか言つて。

黒岩 あー、じゃあなたが一期目の時に、うちの夫が町長選挙に立候補したの？ すごいもうプロっていう感じでね。うちの選挙対策事務所というのは全然素人ばかりだったから、マイクはこう持つのよとか、なんだかんだと技術指導していただいて、お陰で敗れたんですけど（爆笑）。いや、お陰でというのは、実は本当は私みたいな悪妻を持つているから敗れたんです（笑）。今日もね、三和村というこういう村で、あんな若い女の方（小山田さん）が議員をやつておられるということ、本当にすばらしいなと。実は大和町で黒岩卓夫が町長選挙に出た時、婦人部というのがあつて、その婦人部から女性議員を出そうということで、すごく大変だったの。一人出すのに、もう本当に力仕事。毎日毎日その家に五、六人で押しかけて、その人の夫を説得するんです。本人を、じゃないのね（笑）。その女性議員の人も、夫がいなかったらどんなに楽だったかもしれないって言つてました。それまでに離婚しておけばよかったとか、死んだほうがよかったとか（笑）言つてただけで、夫の説得がやっぱり、すごく大変なことでした。自分より上になられたらいやだという男の意識がすごくある。これもま

たおかしいけど、政治というものに対して、みんながすごくいやがつてゐるつてところがあるから、男が議員に立候補する場合でも、女房の反対でかなりだめになるんですよ。うちなんかは夫が町長選に立候補するなんて言うのと、私のほうが一生懸命になつて、やればやれば！みたいな感じになるものだから、みんな議員の選挙の時だけは黒岩秩子を嫁にもらいたいかいいうの（笑）。

吉川（美） 斎藤さんが「女性問題をやりながら知識ばかりお勉強して、頭でかちになることがあるのが心配だ」というようなことをおっしゃったんですが、上越の金井芳子さんが話していたように、学習した女性がどうしても上昇志向に乗つて、リーダーが構成員の上位に立つという感じで、今までの男性社会と同じ構図になつてしまつてゐる。それで斎藤さんが「フェミニズムは皮膚感覚で」とおっしゃったのがすごくビビビつときたんですね。自分が何を学習したいのか、自分はどっちを向いていくのかつてことを考えるときに、この皮膚感覚で決めればいいんだと。

その後で沖繩の映画『教えられなかった戦争・沖繩編』を観たとき、背筋がゾワゾワしてきた。この怒り、このゾワゾワが皮膚感覚かなと考へて。私は、学習中心の女性グ

ループにも顔を出していますが、女性の人権には敏感なのに戦争など政治的な問題になると、それは別なんじゃないのという感じなんです。おかしいと思うのですが、じゃあどうしたらいいのか、その辺を斎藤さんにお聞きしたいのですが。自分の中でも今ばらばらになっているんです。

斎藤 実は今日、女性議員をどうすれば増やせるかと、女性があつと政治にかかわるのには、という座談会でもしていたんだけどなあと思っていたら、自然にそういう話になったので、天の助けと大喜びしているところです。

考えてみると、女性と政治ってことでは、きちんと議論したことないですよ。私は実は、〈行動の会〉のある方に、さんざんおられたんですね。〈あごろ〉は政治的だと。女性運動が政治にかかわることないって。でも、私は女の問題って、すぐれて構造的な問題だと思うんです。構造を変えない限り、個人個人の幸せも、男女平等もない。その構造を考えていくと、政治に行き当たらないわけにはいかなから、〈あごろ〉はわりと政治的なこともやってきたんです。〈あごろ〉の中から積極的に議員を出すということはしませんけど、女性の議員をずっと支援してきましたし、大きな問題があるたびに集会を開いたり請願したりしてきました。

した。国会議員もこの間まで十何人か〈あごろ〉の会員がいらした。小選挙区制になって六人に減りましたけど、地方議員の方も結構たくさんいらつじやるんですね。今後とも女性が増えてほしいと思っていますが、ただやみくもに、女が増えればいいとは、私は今は思わないんですね。

小山田 それはどうして。

斎藤 一口に女性と言っても、女性が一つの階層を成しているわけではないのが女性問題の難しいところですが。特に国会議員は、どうしても「知名人」が候補者になる。それは必ずしも私たちの代表ではないことも多いんですね。また志のある人でも、党議に拘束される。

鈴木 「女性の政治参画」が叫ばれているけど、昨日テレビを見ていたら、扇千景議員(自由党)が「国会でも日の丸・君が代を……」と力んでいました。女性の政治参画もいろいろ複雑だわね。

## 抑圧をバネに議員になった

小山田 私は三和村で議員をやり、三年目をようやく迎えました。お昼の会で、「抑圧を受けた経験がある方」と聞か

れて、真っ先に手を挙げたのですが、会場で発言はできなかったんですね。これは何なのかなあと自分に問い続けています。三十年も前になりますが、私が学校を卒業して最初に勤めた職場では、入社の日「この会社では、女性結婚したら辞めていただきます」と言われ、改めて周囲を見ると、独身女性ばかりでした。そして二十二、三歳位になると、男性社員に「おばさん、いつまでいるの」なんて言われて、大変イヤな思いをしました。一生の仕事にしようと思ってやっと入った職場でしたが、十年勤めて辞めてしまったんです。その後、縁あってここ三和村に嫁いだのですが、昼の会で出たような話がたくさんあり、嫁にはやはり厳しいものがありましたね。一人の人間として認めてはもらえず、今でもそれはそう変わってはいません。でも、大勢の人がいるところで、そういうことは、具体的にはなかなか発言しにくいところがありますね。

斎藤　そういう点、都市では地縁があまり強くないので、〈あごろ〉などで本音で話しても、その話が伝わることはないんで、話しやすいのです。フェミニズムの運動の最初のころは、お互いの思い悩んでいることをずいぶん話し合ったものです。それが第一歩でしたね。だから狭い地域で、

まして議員さんが、大勢の前ではおっしやれないという気持ちはよくわかります。そこはやはり、おっしやらないほうがいいと思います。そんなことで足をすくわれたらもつたいない。話というのは必ず、話に尾ひれがつくんじやなくて、尾ひれに話がつきますから（笑）。

鈴木　抑圧ということでは、私は逆に抑圧があればこそやっています。抑圧がなかったら私の出番がないと……。またまた偉そうなことを言っていますが、本当にそうです。抑圧が全くなく議員バッジを着けて、皆さんの税金をいただいている人たち、何のためにやっているのかなあ……。

私は九一年の統一地方選で当選し二期目です。先程、女性立候補する時の夫の存在が指摘されたけど、私は両親と娘たちが背中をボンと押してくれたので、決断はラクでした。特に母は長年、地域で婦人会の活動や社会教育委員などをやってきたこともあり、一番の理解者でした。でも企業城下町での議員活動が、いかに両親を心配させ、その寿命を縮めてしまったか……。大きなものを代償として失ってしまった、そのことを考えると胸が詰まってしまいました。この二月に母の一周忌、そして四月の改選、定数削減もあり大変だけれど、一生懸命やらなくっちゃ。――もし



落ちたらどうしよう？ 皆さん、その時は一緒に考えてね

(笑)。

黒岩 今朝ね、家を出るとき夫が「鈴木塾子さんは風格があるよなあ、よく見てこい」って言ったんですよ(笑)。

小山田 私の場合は(立候補する時)、夫がまず「やってみたら」と言ってくれたのが第一歩で、でも自分自身の決心がつかなくてね。本当に苦しい決断でした。当選してから大変なことになったなあと思いました。応援して下さった方々には申し訳ない気持ちでいっぱいだったけど、半年来いも気持ちが悪く落ち着かなかったですね。でもこの会で勉強させてもらっていますし、その気になれば各地でいろいろに勉強できる機会もありますし、うれしいです。

## 町長選が九期無投票の「恐ろしい町」で

鈴木 地方自治は民主主義の学校って言われるけど、青海町の町長選挙は九期無投票、県内でも異例の記録です。

黒岩 九期はすごいよねえ。

鈴木 企業城下町の有形無形の圧力……。『この国は恐ろしい国』(関千枝子著)って本があるけど、『この町は恐ろしい

町』っていう本が書けるくらいよ。三十六年間、町長選挙がないってことは、住民のほとんどが一回も投票を経験してないってことね。

今、政治家の資質が問われているけど、国会議員を支えているのが地方議員。これが大問題。町村議会議員に至っては、議員報酬が少ないこともあって、みな「二足のわらじ」的で勉強しないし、しなくてもどうってことない。町村議員の資質の向上が国政を変えていく要でもあるけれど、ここがなかなか変わらない。専業として成り立たず、若手議員も少ないし、無投票も多くなり、資質が問われなくなってきたいるわね。地方公務員の場合、給料格差は全国それほど大きくないのに、国会議員・県会議員・市町村議会議員と系列化され、格段の報酬差もあって、町村レベルではやる気が出にくいのが現状かな。県議会は「中二階」とも言われながら、町村議員の五倍以上の報酬。五倍の仕事をしているとも思えないし、逆に庶民の感覚からズレて辞めたがらないのも問題よね。国も地方も、議員バツジ着けて「お上」に追従し、ポーズだけの人が多すぎる。何とかしなくっちゃ、政治はますます悪くなるばかりだね。

小山田 私も「二足のわらじ」をはいている議員の一人で

すが、いま地方議員の質の問題が問われているけど、本当にそう思います。私の村の議会でもそうですが、選挙のあり方にも問題が多いですね。集落推薦が主流で、選挙にお金がかかり過ぎるので、誰も進んで立候補する人がいないのです。結果的に頼んで出てもらうわけですが、当選してしまえば集落の責任はそれで終わり。後は本人にお任せで、日頃どんな活動をしているかは誰も問わない。したがって勉強しなくてもどうってことないのでしょうか。行政側からの提案についてはほとんど賛成し、村長が替わって全く反対の事が提案されても、質疑もしないで賛成するし、何のための議員なのかと思いますね。

この「米本陣」の山の上のほうに、産業廃棄物の処分場があり、違法性をめぐって住民が県を相手に行政訴訟を起こしているんですよ。県知事を被告にしていることで、県からの補助金が他の町村に比べて少ないなど、なかなか住民の側に立っていないように思います。これなら議員の数をもっと減らして、本当に働ける議員に専業でやれるだけの報酬を出すべきでは、とも思うけど、そのところが議論のあるところでしょう。女性が政治に参画することによって、集落推薦の枠組も崩れていくでしょうし、女性は

勉強していますから男性にも刺激を与えますよね。そういう点では、どこの地方議会にも女性議員が出ていくことが望ましいと思いますよ。

斎藤 鹿児島初の革新系無党派市議で〈あごら〉の會員、小川みさ子さんの『女ひとり地方議会に春一番』を編集して、つくづく感じたのですが、地方の女性議員は、住民に直結する代表として、すごく勉強しているし、活動もしている。国会議員よりはるかに大変だなあと感じました。

でも報酬は、鹿児島市議で年収約九百万円。鈴木さんや小山田さんは約三百万円というお話ですね。新潟の県議がおよそ千五百万円とか聞きましたが、国会議員は助成金や通信費も入ると四千万。市民感覚がなくなつて特権意識が強くなるのも、議席を絶対に失いたくないと思うようになるのも、無理もないと思います。格差がありますね。

市民代表で国会に入った方たちも、党議拘束に縛られて、「女性」であつても「男性」と変わらなくなる。本当にいい仕事をしておられた外口玉子さんや栗原君子さんなどは、市民の心に沿う活動をなさったばかりに党内で敵視されたり、〈連合〉の支援が得られなくなつて落選なさった。そうになると、新しい党でもつくらなければ、少なくとも国会で

は、女性を立てても意味がなくなるのか、と心配になります。

鈴木 新潟では今、倉元正子さんたちが代表の〈女性議員ゼロ議会をなくそうリレー・フォーラム〉や〈女性議員を増やそうネットワーク〉などの活発な動きがあります。

私は、〈虹と緑の500人リスト・新潟〉のメンバーの人ですが、県内の女性で名前を連ねているのはわずか数人だけです。女・女を看板に立候補し、議席を獲得してからの姿があまり見えてこないのも実情のようです。

斎藤 倉元さんは、〈リレー・フォーラム〉の代表になれば、どんな中傷を受けるか覚悟のうえで、あえて無党派のご自分が代表をお引き受けになったとか、ご苦労話をうかがいました。どうしても政党が顔を出したがるのでいろいろ問題はあれど、「県議の女性ゼロ」状態は、なんとかなくしたい、と頑張っているらしいですね。

〈虹と緑の500人リスト〉は、無党派の質の良い人たちを集めていたのですが、この会の方にかがったお話では、各政党の人氣が衰え、無党派ブームになった今、〈虹と緑〉に入りたいという方が増えて困っているとか。——困っているというのは、〈虹と緑〉の理想とは遠い方が、衣装だけ

変えようとしているのだそうです。

## わかってもらえない「新ガイトリフン」の怖れ

斎藤(良) 今日、色黒いでしょう。小渕総理の国会答弁を運転しながらラジオで聞いてて、なんかアレギーみたいになってきて、雪でスリップして電柱にぶつかったの(爆笑)。私、古い車に乗ってて、皆さんみたいにボンと押すとNHKが出るとか、民放が出るんじゃないものだから。

鈴木 それでぶつかったの？

斎藤(良) うん。ラジオのダイヤルをクルクル回している時にね、前を見なかったの。前に電柱あると思わなかったもの(笑)。それで今日、夜の部は欠席しようかと思ったんですけど、斎藤千代さんって普通のおばさんで、本当に皮膚感覚でね、とってもいいお話を聞いたと思って。今度はぶつからないようにね(笑)。

私は常々、政治は大事なものだと思っております。政治というのは、税金の使い方だろうと。今は税金の使い方がものすごくアンバランスで、庶民のほうには全然降りてこない。でも日本人はものすごく裕福で、貯金が千二百万円

も一軒あたり平均してあるなんていうけれど、まあ平均だからねえ、持っている人は持っていますけど。

昼のお話にもあったとおり、地方から政治を変えていかないとだめなんです。そういう意味では、鈴木さんや小山田さんは本当に貴重な人材だと思います。ぜひ住民のために目を向けて、行政のやることに横積み上積みしてやって欲しいです。そうすれば本当に地方から政治も変わるんではないかなあと思うんですけど。

それと今一番大事なことはガイドラインの問題だよ。

関山に、このすぐ近くに、米軍が演習にくるなんていうのはどんなことしたって抗議しなくちゃいけないなあと思っています。安保条約というのはね、もういりませんと言えば、一年後にはなくなるといふ話ですよ。

斎藤 一年前にどちらか一方が通告すれば解消できると、条文に明記されているのですが、そういう大事なことが国民に知らされていないんですよ。

斎藤(良) なんて五十年間もね、黙っているんだろうかと。一番不思議なんです。中曽根首相の時にはね、日本は不沈空母だなんて言ったんだもの。あの言葉を聞いてね、もう本当にあきれかえっちゃったんですけど。いつの間に

か本当に戦争に巻き込まれるのかなあと思うと、私は先が短いからいいけれど、これからの若い人たちは、心して議員を選んでもらいたいと思います。

鈴木 安保の話が出たけど、六〇年安保で実際に羽田に行つて、その年、学生結婚して……という黒岩秩子さんが、二十代のときの六〇年安保の思いと、今五十代の後半の安保に対する思いはどうか。

斎藤 樺美智子さんと同世代でしょう。

黒岩 そうです。一年違いです。うちの夫は樺さんと同じ場所において、意識不明で入院してたんですよ。実は今度のガイドラインというのは、英文ではウォー・マニュアルっていうんですよ。実戦のマニュアルです。最近朝日新聞に出てたよね、かなり詳しく。誤訳しているっていうか、かなり違う意味になっている。そういう意味ではガイドラインの反対の署名がありましたね、〈あごろ〉の。あれ随分たくさん集めたんだけど、二次というのがこないんですよ。

斎藤 まだやってます。少し文言を変えて、あれをもう少し〈あごろ〉らしいアピールにしたいなあと思っています。黒岩 関山は湯布院とすごく関係が深くて、湯布院が米軍

の実弾演習にNOという、関山に来るっていうかたちで、関山か湯布院かという感じでやってるんですね。湯布院は中谷健太郎さんという人が「ふくろうの会」というのを作って反対しているんです。その反対の仕方、湯布院はいやだという言い方でなく、沖繩も湯布院も関山も、っていう同じ感じでやってね、「ふくろう」というのは、「よく見える知恵の鳥」ということらしいですね。

斎藤(良) どうして、六〇年安保のような闘争にならないんだろうね。

黒岩 やっぱりあれが負けたというのは決定的だと思います。岸信介というのは、命を懸けましたね。

私なんかは五八年に大学に入って、勤評闘争、それから警職法闘争をずっとやって安保になつていったんだけど、安保の時って、本当にすごかった。六・一五で樺さんが亡くなった次の日、学校に行つてみたら、授業が全部ないんです。先生も全部デモに行つたんですよ。東京都内の大学は、ほとんど全部授業なかったと思います。それでわーっと国会取り囲んで、私たちはあの後一週間ほとんど寝るという、電車に乗つた時、吊り革につかまって寝るだけだったですよ。夜もずーっとデモやっていましたから、一週

間というものの、もう全く寝ずでやったわけですよ。

斎藤(良) 昼の斎藤さんの話で、本当の情報流れないという。情報操作でそういう運動をさせないようにしている。本当のことを知れば、みんな怒ると思いますよ。

黒岩 いやー、それはちがうと思う。私、大和町で町長選挙やってみてすごくよくわかるんだけど、今でいい、変化はいやだ、とみんなが思っているのよ。情報がどんなに流れても、今のまんまでいいと思ってるから、そして戦争になると思っていないの。

斎藤(良) 本当のこと話せば、もう戦争だと思ふわけだよ。後方支援のこととか。

黒岩 どうかなあ。

南雲 大体の人は、考えすぎじゃないの、と言ってますね。そんなの日本が戦争するわけじゃないでしょう。バカじゃないかっていうような言い方をされる。

斎藤 米軍が北朝鮮を攻撃しないかぎり、北朝鮮が日本にミサイルを打ち込む理由はない。だから、常識的に考えれば戦争はない。それを「北朝鮮がテポドンを日本の頭越しに発射した」という情報を繰り返し流して、「だから安保を強化しなくては」という気持ちにさせていく。しかし、本

当に怖いのは、米軍の基地が日本にあることではないでしょうか。最近は特に急降下訓練などが激しく、各地で事故が起きてますね。もしも原発の上にも落ちれば、たちまちチェルノブイリです。米軍はスーダンやイラクをいきなり攻撃しましたね。そういう米軍の基地が日本にあるかぎり、日本は戦争に巻き込まれる可能性がある。新ガイドラインで日米軍事同盟が現在の安保よりさらに強化されれば、その危険性はさらに大きくなる。それなのに、「軍事同盟である安保をやめて日米平和友好条約を結び、米軍基地を、沖縄はもちろん日本全土から撤退してもらう方法もある」というような情報は、全く報道されないのです。

## 「行動」で情報操作に抵抗しよう

古川(和) 私の父は、私が小学校一年生の時に亡くなり、母が女手一つで三人の子どもを育ててくれました。就職する時、母子家庭だからダメとか、長女でしたので私が男の子だったらこれで母親も一安心なのという周りの声に、女なんて損と思ったし、入社した所は女は結婚したら退職なんて規定まであり、社会に出た一歩から差別を突き付け

られ、ずっと女に生まれなくなかったと思ってきたんです。昨日、東京で河合隼男さんの講演を聞いてきたのですが、今大切なのは情報や知識でいっぱい頭の頭でわかってやることではなく、「腑に落ちる」ことだと言われたんです。これって今日斎藤さんが「皮膚感覚を大事にする」と話されたのと同じ。二日間、言葉は違っても同じことを聞いたと思っただけです。だとしたら、知識を得ることより、皮膚感覚が鈍くならないよう常に磨かなくちゃあと。

母は戦争真っ最中に結婚し、新婚生活もないままに父を戦地に送り、二十歳そこそこで一人残されて父の帰りを待ったのです。きっと戦死も覚悟したのだろうと思うのですが、敗戦後も何の便りもないので、実家に戻ろうとした頃に突然復員し、結婚生活七年後に父は三人の子どもを残して亡くなってしまったのです。母は戦争の話になると、悲惨だったことや我慢したことなどをいろいろ話してくれましたが、どうして誰も反対しなかったのか、なぜ黙って言われるままになったのか、子ども心に、とっても不思議でした。その事や、被害者どころか加害者だったことがわかるのはずっと後になってからでした。

今はあの頃より情報も知識もたっぷりあるし、「戦争への

道」の動きも、皮膚感覚ではもうわかつているのに、現実は何もしていないんです。これでは私が母に言ったと同じことを子どもに言われるなあ。

そうなりたくないと思うと、日米ガイドラインを見越させないわね。この二月に、昨年に引き続き、関山演習場で行われる雪中の日米合同演習に対しては絶対行動しなくてはと。黙ってはいられません。政治は政策。春の選挙では心して投票しようと思っています。昼の会でも話が出ましたが、二月二十七日、ここ上越文化会館に、藤岡信勝や小林よしのりが来るんですよ。このチラシ（シンポジウム「我々がめざす教科書運動」を見た時は、鳥肌がたっていました。これだけ騒がれているのにねえ。

黒岩 小林よしのりなんか、かなりかぶれているわね、若い人たちは。従軍慰安婦の署名なんかでまわると、若い人が「私しない、小林よしのりの読んだもん」。

古川(和) 逆に私たちのほうがおかしいと思われかねないわね。もつともつと声を出していかなきゃならないんじゃないかなあ。

〈あごろ〉 って原石だというお話がありました、〈あごろ〉が掘り起こしたものを大資本などが取り込んで、その

本が売れているんだけど、でもその中で二十七年間投げ出さず続けてこられたことを、私はすごいなあと思います。私もそういう活動というか、生き方をしたいと思っています。今は直感で生きて行くほうが簡単だし、上昇志向の勢いによって行けばすぐ評価が出るし……。でも私はそうじゃない生き方のほうを選びたいなあと思います。

森沢 先程の教科書問題についてですが、本屋さんのレジのところに小林よしのりの本が置いてあったんですよ。私もこないだ、ぱつと見て「ああ、やだ」と思っただけで帰って来ただけです。

黒岩 全部本取って来ればよかったのに。

森沢 取れない、取るのもいやだったもの。でもそういう反発するというのは難しいというか……。情報だけはいっぱいある中で、今日の講演会のお話は皆さんおっしゃったように、すごくしみ込むようにきーと入ってきたんで、こういうお話を聞きたいと思う。同級生は三十代で一番忙しくて、新聞も毎晩は見られない、たまっちゃうという人たちが多くて、みんな身近でこういう話をしたいなあと思うんですけど、やっぱりなかなかできないのが現実です。でも時間がないということは怖いなあという気がする。

それが本当のことなのか、何が間違いでオカシイのか、自分からアンテナしっかり張って、自分でそういう感覚を補っていかないと。これからの子どもたちのこともすごく心配です。「こんなゆつくり考えていられないのよ」とか友達に言われて、「そんなこといいのいいの、保育園の入園料がね」とかそっちのほうに話がわーとなっちゃって……。いろんな問題をいっしょに話せる場が、もっともっとほしいなあと感じます。

## イラクの真相は

鈴木 情報操作の話が出ましたが、斎藤さんは湾岸戦争の報道がどうしても腑に落ちなくて、停戦直後のイラクに飛んだ方。そのレポート『見えない戦争』には、報道と真実のギャップが書かれています。昨年春、そしてラマダン明けの今年も、米軍は激しい爆撃をしましたが、イラクについて、実情を話してくださいませんか。

斎藤 暮れに空爆があった時、いろんな人がいろんなコメントをしました。私はアジア経済研究所の坂井啓子さんが「イラクは『査察を拒否するわからず屋』というように

報道されているけれど、イラクにしてみれば八年間も査察を受けてきたのに、経済制裁が全く解除されない。それがどんな苦しみをイラクの民衆に与えているかも報道されない。査察を拒否すると、はじめてイラクの事が報道される。あれはイラクにとつての報道手段」という意味のことをおっしゃったのが、いちばん納得できました。アラビア語でどんなに発信しても、欧米には伝わらない。そんな過激な方法でしか表現できないというのは、一時期パレスチナ人が飛行機のハイジャックをしていたのと、よく似ている。結果としてパレスチナもイラクも「過激で無謀な国」という印象を与えてしまったわけですから、ずいぶん下手な方法ですが、超大国の言語、大国の情報ネットが、世界の情報を支配している今、そんなふうに彼らが追い込まれたというのも、うなずけます。

私は九一年の三月に行って、その一年後、もう一度行ったきりですから、一次的な最新情報は持っていませんが、現地に行ったのは良かった。百聞は一見にしかずでした。特に二度目は一か月かけて、イラクの北端から南端まで、ほぼ全域を見ることが出来、とても勉強になりました。

ちょっとおたずねしたいんだけど、サダム・フセインの



職業をこ存じですか? (「軍人」の声、一斉に)

職業は弁護士です (「エエツ」の声)。

人口は? (「三千万」「五千万」など)

最近は二千二百万と報道していますが、七年前は千六百五十万と言っていました。台湾と同じくらいですね。世界に脅威を与えるような国ではないのです。

国家予算は? (返答なし) 九十億ドルです。——この数字、ご記憶がおりでしよう。日本が最初に米国に渡したお金です。その後追加して結局百四十億ドル渡した。日本がイラクだとすると、Aという国が日本を攻める軍資金をBに頼んだら、Bは「これで日本をやっつけてください」と百二十兆ポンと渡したというのと同じことです。

日本は「金だけ出して血を流さなかった。だから安保を強化して、新ガイドラインで今度は民間も総力をあげて協力しよう」というのが、いま「正論」のように言われてますね。これは、暴力団に奉加帳を回されて攻撃する相手の国家予算の一・五倍もの大金を出し、今度はその暴力団に港から船から道路から病院まで提供する契約を結ぼうとしているのと同じこと。日本は百四十億ドル出して、罪もないイラクの子どもや老人を、二十万人以上も殺したのです。

二度と戦争に加担しないようにすべきです。

九二年に二度目に行つて、改めて痛感したのは、「あれは新兵器の実験と、たまりにたまつた爆弾を一掃するための戦争だった」という実感でした。あの頃アメリカは過重な軍事費で経済が衰え、軍需産業を平和産業に切り替えようとしていた。軍需産業の猛反発があつたのでしよう。

今度の爆撃も、テレビで見る限りでは、まさに同じ原理だと思ふ。しかも今度は、八年間「査察団」という名で詳細な現地調査をしていますから、どこに打ち込めばよいか明確。この上ない「生体実験」だったという気がします。イラクは「査察団の実態はCIAとMSD(モサド)イスラエルのCIA」だ」と言い続けていますが、あの爆撃の正確さを見ると、イラクの言うとおりではないかという気がします。

(アメリカはどうしてそんなにイラクが憎いのですか?) 異教徒、有色人種のくせにアメリカの言うことをきかないからでしょうね。日本は五十三年間、何でもハイハイと従つてきた。イラクは、あれほど痛めつけたのに、メソポタミア以来六千年の歴史を誇つて頭を下げない。

基本的には産油国という条件もありますね。原油のメジャーが大統領の選挙資金を出しています。もう一つ大きい

のは、社会主義国だということ。(エッ！社会主義国なんですか)(イラクって、もともとどの国は？の声々)イラクになる前はオスマントルコです。

黒岩 ああ「アラビアのロレンス」にやられたんだ！

斎藤 それでイギリスの統治下、人工国家イラクが生まれ、その後、ひと続きだったクウェートが別の国になった。そのために、イラクは長野県のように海のない国になったのです。「この処置はひどすぎる」という文書は、イギリスの王立文書館にも残っています。

南雲 社会主義国には、いつからなったのですか？

斎藤 三十年前、フセインが、部族間でバラバラになっていたイラクを統一してからです。(それでフセインが憎いわけだ！でも独裁なんでしょう？の声、声)。

独裁は事実ですね。残念ながら社会主義国がほとんどそうであるように、反乱すると厳罰に処されるようです。

でも、社会主義国なので医療費はゼロ。病院は二十四時間初診でも受付けています。税金も社会保険料も授業料も不要、大学生には給費が出ます。国民のほとんどは国家公務員で、給料は公開されています。フセインさんが六十四万円、中卒が十二万円、完全な男女平等で、私が会った女

性の保健所長は三十五万円でした。家族全部働いているので、フセインさんより高収入だと。(「エエ」の声)。時間がないのでこれくらいしか今日はお話しできませんが。

## 働く女性と主婦の年金

南雲 講演の中に年金のお話がありましたが、専業主婦だった人が、ずっと勤め続けた人たちと同じような年金を受け取るということはおかしいのでしょうか。私も所得税は払っているのですが、夫の扶養の範囲にいますので、三号被保険者で保険料は払っていません。この制度が女性の経済的自立を阻み、女性を家庭に閉じ込めようとしているというのはわかるのですが、専業主婦が定年まで勤め上げた人たちと同じ年金を受け取るのはおかしいというのは、「働かざるもの食うべからず」というように私には聞こえ、福祉の後退にもつながるのではないかと感じましたが。

斎藤 私は基本的には、年金は所得の高低にかかわらず、同額をもらうのが本当ではないかと思っています。八〇年にデンマークで聞いた話では、受ける基本年金は一律約十五万円、納めた額に比例する部分は五万円程度しかない。

二十年前の話ですから、今なら三十万円くらいは誰でももらえるのです。北欧諸国には専業主婦というのはほとんどいないのですが、職場で働こうと働くまいと、誰でも年金で暮らせる。「所得に応じて」というのは、人間を生産要員として考えているようで、基本的には間違っている、と私は思います。所得の多い人は、多少の貯蓄もできる。少ない人は老後の貯えもない。そのうえ年金で差別されるのは、過酷なことだと思います。逆に所得が低かった人は、年金を多くしてもいいくらいではないかと思うほどです。

そう考えている私が、「専業主婦と働き続けてきた女性が同額の年金を受け取るのはおかしい」と言ったのは、働き続けてきた女性が受け取る年金のほうが、専業主婦の年金より少ないことが多いからです。いま年金を受けている世代の女性の年金収入は、公務員などを除くと、通常は男性の半分です。今の日本では、納めた社会保険料——これは給料に比例していますが、それに比例して受け取るんですよ。そうすると女の人は給料が安いから、男の約半分しか受け取れないんですよ。それで、一生懸命働いてきた人より、主婦のほうが多額のお金をいただく。夫の給料が女性の倍という差別の恩恵を間接的にせよ主婦が受けている

というのは、やっぱりちょっと納得がいかないんですね。今でこそ女も働きやすくなりましたけど、昔は女が働くのはほんとに大変なことで、それこそいろんな職場差別の中で、でも「働き続けない限り、次の女の人は採用しなくなるから」と頑張つて、中には結婚もしないで何十年も働いてきて、厚生年金は平均十一、二万ですよ。主婦だとお金を全く納めないで主婦個人の年金が五万円以上、遺族年金でも二十万受け取る。これは、納得いかないんですね。

黒岩 ただその主婦も、離婚するともらえないんですね。

斎藤 そうなんです。三十年いっしょにいても離婚したら、一円ももらえず、一か月でも最後にいた人のところにいくんです。さすがに、厚生省もこれは公平の原理に反すると去年の「厚生白書」では、はっきり指摘しています。

もともと主婦は、自営業者と同じ扱いで、夫とは別に「国民保険」に入っていたのを、女だけ、結婚と就業によつて一号・二号・三号の身分を転々とするように変えてしまったのです。ちょうどその頃「家庭基盤の充実」が政策として打ち出された。その一環としての改悪です。私たちは「女を家庭に戻そうとするくらみだ」と大反対したのですが、

私は給与所得者と自営業者の年金制度が別になっている

のもおかしいと思っています。税制がいわゆるクロヨン（九・六・四）で、給与所得者は九割捕捉されている。自営は四割。税制で自営業が優遇されている分、社会保険は厳しくなっているんですね。厳密に言うと、税制から洗い直すべきだと思います。妻が働かずにすむ家庭は、平均すれば夫は高所得です。妻も最低掛け金は払うべきではないでしょうか。今は学生からも国民保険料をとる。とすれば、主婦だけが免除されているのは、主婦を一人前と認めていないことです。月額一万三千円くらいですから、掛け金は自分で稼げると思いますよ、どんなことをしても。

健康保険も、扶養家族は全然保険料が要らない。しかも前は医療費の負担が本人が一割、家族が二割だったけど、今は本人も二割になったから、働いて、きちんとお金を納めている人ほど損になる。税制や社会保険制度に「家制度」が組み込まれているのは、おかしいことです。

南雲 前はちゃんと自分で払っていましたよ。

斎藤 払っていましたよね。年金二階建ての制度を作ったときに、主婦優遇の制度に変えたんです。それを推進したのは、厚生省の課長、後に法務大臣になった女性です。私たちは「おかしい」とさんざん抗議したけれど、「とにかく

主婦が無年金にならないように」ということで押し切られた。でも当時だって無年金ではなかったんですよ、国民保険に入っていたのですから、自営業の人と同じだったわけですね。そして掛け金は出していた。夫が出すか、自分が出すか、とにかく納めていた。家庭基盤の充実という政策を打ち出したのと、見事に呼応していたと思います。

南雲 それがよくわからなかったから。お話を聞いてみると、女は外に出さないようにするというのがみえみえだね。

黒岩 三歳までは母親が育ててという時代ね。

南雲 学生はしつかり一万三千三百円払わなきゃいけないというのにね。

黒岩 あの彼女の仕業だったの。

斎藤 それで頑張ったので、自民党から参議院の全国区で推されて法務大臣になられたでしょう。法務大臣になって、最初になさったことは死刑の執行ですね。だから私は「女性になりさえすればいい」とばかりは言えないと思うんです。権力は、自分に都合のよい女性の立身出世のモデルをつくり出すんですね。

均等法でも、女性の局長が官僚として頑張った。議員さんたちが厚生大臣に質問をすると、必ず代わりに答弁する。

蓄積がありますから、金子みつさんでも大刀打ちできないんです。それで私たちが「禁等法」と呼んだあの均等法が問題のあるままだに通つたんです。その功績で、国連大使になり、文部大臣になったわけですね。「役に立つ」と政府が認定した女性が発用する。植民地での現地人の登用と似ています。横溝 私は高校を卒業してから現在まで、民間企業に勤めています。今は育児休暇がとれるようになりましたが、私の頃は産前と産後四十二日間の休暇で、二人目の子どもは知人に預けて、共働きを続けてきました。そんなわけで今の年金の話になりますと、うんうん勿論そうだと。これは個人として考えるのが当たり前で、第三号被保険者は、拠出しないで年金をもらえるのはおかしい。夫の分から妻の配分ができないのはなぜか、いつも不満に思っています。

昼の部で、「抑圧された経験はありますか」という質問があった時、私は手を挙げることはできませんでした。自分の性格で自分流に強引にやってしまうこともあると思うのですが、こういうふうには勉強を重ねてきても、本当のところはまだわかっていないのかも知れないと思いました。仕事はある程度経験からこなせるのですが、世の中の事が全然よくわからないので、「あーら」からいつもタイム

リーに話題を提供いただき、私にとって、強力なテキストになっていきます。今日いろいろなお話を聞きながら、昨日とは違う今日の私でありたいと考えているところです。

### 嫁・姑問題はかなり改善されたけれど

神林 皆さん私に比べれば若い方ばかりで、ちよつと気が引けるんですが、私は四十年ばかり職場におりまして、その当時は男女に格段の差があつた時代です。女の人には昇格や昇任、役職を与えないのが当たり前、どんなに頑張つても、自分では男の、ある一定の人たちよりもやっているとは思いましたが、女は転勤できないからあなたは昇進できないんですよ、と、転勤で卒にはめちゃうんですね。その時はああそうなんだなあと、自分を納得させていたわけなんです。

そして四十年勤めたら、心身共に疲れましたので、家庭に入りましたら第二の職場が待っていたのです。それは孫を育てる、家事を一切やる、という第二の職場です。私もそれはしょうがないと、自分を納得させて、孫の子守りを始めたんです。内孫は男女一人ずつだったんですが、さつ

き黒岩さんがおつしやつたように、さて今度は男の子、女の子という差別のある育て方をしないと……。孫育ても年齢になつてくると、大変なんですけどまたそれもひとつの生きがいなんです。保育園で若いおかあさんたちと交流できるのも、まあ私のひとつの楽しみなんです。若いおかあさんたちから、現代の子育てということについて教えてもらつて、なるべく昔の子育てでなく、現代の子育てに近いのをやりたいなあと、思つてやつてきました。

黒岩 現代の子育てつて恐ろしいんじゃない。お受験とか（笑）。

神林 肝心なところは、孫の両親がいますからね、そういうところはやつてもらいます。そしてこの会に入れていただきました。このまま家庭にいますと、頭がちよつとねえ、どんどん老化していくんじゃないかと、そういう気持ちだつたんですけど、若い人たちからいろいろ元気の出る力をもらいまして。今では家族もこの会があるというところ、「ばあちゃん行つてきない。行つてきない。ばあちゃんが留守の間は自分たちでなんとかするから」つて言うてくれるんですよ。多分本心は、ばあちゃんがボケ老人にならないことを、若い者は期待しているのでしょうが、まあそのこと

ばに甘えまして、みなさんの仲間に入れていただきまして、いろいろ現在の社会で起きていることや、そういうのを教えていただいています。

山本 私は生まれは柿崎の山寺で、養女に來たのは高田の寺町。もつと大きなお寺に來ました。

山で暮らしていた時にはなんの抑圧もなく、三人姉妹の真ん中でしただけ、お寺の子であることも感じずに、野山を駆け巡る、自由奔放な娘でした。養女に來るとするのは自分で二十歳のときに判断してきたにもかかわらず、どういうわけか、しつかりといい奥様といい母親をやつて、三十年黙りこくつてきたんですが……。自分の表現というものの仕方を知らずに、まあ養女にきたんだからおとなしく、「両親のいうことを聞いて、お父様お母様と、はいはい、はいはいで、きたんです」。

数年前、町内の回覧板が回つてきて「ウーマンカレッジ」とかいうのが上越教育大学であるというので受講しました。梅雨の最中、自転車で雨合羽着ましてね、すつころんだけがをしても休まず、あの時は吸収しましたね。あれから少しずつ自信をつけさせていただきました。皆さんをみると、自分だけじゃない、いろんな境遇の方がいて、こん

なふうにならずに進んでいるんだなあ、こんなことも話していいんだなあということがつかめてきました。どういうわけか三十年間黙りこくっていましたので、これからは表現の仕方をひとつずつ覚えて、両親にもちゃんと、と……。

二年前に初めて打ちあけたんです。「私はずーっと打ちのめされてきた」と。「うちの卓子ちゃんねえ、柿崎から来たのよ。山奥から来たのよ」。その山奥も余計だと。私そういうことから少ずつ、自分のことを言うようになってきました。でもまだわからないことがたくさんございます。しなやかに、しなやかに、耐えてやっておりますので、どうぞよろしく。

斎藤 二年前に初めて打ちあけたということは、それまで何十年もだまっていたらした、ということですね。同世代の私には、その哀しみ苦しみ、よくわかります。昼の部でも、お姑さんに自分あての手紙を開封されたという話が出ましたが、他人の手紙を開封することが人権の侵害だとは、一般にあまり思われていないという社会的背景があるために、そういうことが罪の意識もなく行われるのだと思います。

私は両親からフェミニズムを学んだことがたくさんあるんです。たとえば手紙。昔は門のところに手紙がきてて、

子どもの役目のひとつが、朝起きたら門の所にいつて、手紙をもってくることでした。郵便物はお手伝いさんなどにも来るわけですが、その時に言われたことは、決して裏を見てはいけません。差出人を見るのは信書の秘密を侵すことだから、そういうことはしてはいけませんって。小さい子どもにはシンシヨノヒミツなんてどんな字を書くのかもわからないけど、これは大事なことだなと思うわけですね。そういう個人の尊厳を守る所から人権運動が始まるというのはフェミニズムの基本ですね。それが一般化すれば、嫁に対してそういうことはできなくなると思います。

父は判事だったんですけど、「司法は人権を護る筈」というのが持論で、権利を侵すことは絶対にしてはいけない。紙一枚、私物化してはいけない、と言われました。小学校二年生の時、学校の代表で作文を清書するようにと、言われ、間違ってもいけないからと、十枚紙を下さったのです。紙が五枚余ったとき、その紙は学校にお返ししなさいと。こんな紙くらいなんで返すのかなあと思いましたら、その紙は公のものだから、ちゃんとお返ししなさいと、公私の別をとて厳格に言われました。

中元とか歳暮についても、もともと神仏に関わる儀式な

のだから、親とお仲人の所にだけご挨拶にいけばいい。商品化するような邪道はしてはならないと、お歳暮の季節には、子どもが玄関に並んで到来ものを追い返す役回りをさせられました。そうして子どもに教え込むわけですね。一物たりとも受け取ってはいけません。

今いろんな汚職とかありますね。民間だつて付け届けが結構激しいと思いますが、私たちのやつているBOCという女だけの小さな会社は、一度もしたことがないんです。それでは企業が成り立つわけがないと言われたけど、三十九年間、まだつぶれません。うちだけしないものですから、随分意地悪されたりいじめられたりということがありましたけど、お礼するなら仕事で返すのが本当だと。

お使いものをしたら楽しんでしようけど、仕事が甘くなる。先方が十ということを考えたとき、十二のことをしたら、それが一番のプレゼントになるので、物で返すべきではないと思います、お使いものつて一切しないんです。三つ児の魂というか、感覚的にやなんです。

南雲 お姑さんで苦労されたというお話を、今日初めて聞きましたが、やつぱりお姑さんが年上だからということ、やつてこられたということですかね。卒論にも女性間

題を取り上げられた方が、結婚してそういう立場にいたということは……。どうして反響なさらなかったのですか。

斎藤 アホでした。当時はご想像つかないくらい、気が弱かったです。ここは自分が辛抱して、そのかわり私が次の世代には決してしないということで、この連鎖を切るしかない、と思ったの。本当に気が狂いそうでしたよ。半気が狂っていたかも知れません。でも話すことによって、お互いにメチャメチャに傷ついて、両方がだめになるより、私のほうが多少辛抱がいいから我慢しよう。

黒岩 相手にもよりますよね。やつぱり言えるかどうかというのはねえ。

斎藤 理解してもらうのは至難の業だというヨミがありました。小学校の時、先生と私の母の間に大騒動がおきたことがあるものですからね。先生のやり方を、母が批判した。母の考えは正しかったんですけども、親と教師が争うくらい、つらいことはなかったんです。そのことが尾を引いているから、争えば苦しむのは夫だろう。自分がぐいとめられるかぎり火の粉を受けとめよう。半分くらいコゲても死ぬことはないから、やけどが治るのをまつてまた生きて、長い時間をかけて改善するほかない、と。



神林 今の若い人たちの嫁姑の関係と、私たちが嫁になったころとは大きい違いなんですよ。今の人はそんなの口で言えばいいじゃない、喧嘩したっていいじゃない。三日や四日、家留守にしたっていいじゃない、家飛び出したっていいじゃないってことなんですけど、私たちの時代は飛び出せば、もう帰って来なくていいです、ということになりかねないからねえ。舅は舅さんで、やっぱりそれだけの権限をもっているんだと。やっぱりそういうときは考え方が幼かったんですね。

斎藤 日本は、代々、女が我慢して、マグマがたまりにたまっているから、弱いお嫁さんがきたら、ライオンの前にウサギがきたようなものです。食べることによって、自分を癒す。この連鎖は、何としても私たちの世代で断ち切ろう、というのが私たちの世代だったのではないのでしょうか。昼の会で、「お嫁さんには、法事の席にお膳がない」とか、まだまだ問題が多いことを改めて感じました。そういう時に、どういうかたちで自分をきちんと主張するか、CR(コンシャスネス・レージング)自分の心の内奥を見つめる訓練とかアサーティブ・トレーニング(建設的な自己主張の仕方)とか、フェミニズムでの現実的な訓練を受けて、

私も少しずつ「ものが言える人間」になりました。

憲法で「平等」が基本的にうたわれ、そしてたくさんの女たちが、裁判に訴えたり、さまざまな抗議をしたり、いろいろな局面で女も実力があることを示して、価値観を変えていったことは、大きな成果だったと思います。

この間、昔から運動してきた仲間と話し合ったのですが、まさか生きているうちに、こんなにもよくなるとは思わなかった、と。これは世界中の女が連帯して国運を動かし、女が差別されるのは、人権問題としてあつてはならないことを、一般化させていったことが大きかったと思います。

フェミニズムは、人権運動です。ですから、女に対する抑圧だけではなく、フェミニストは、すべての差別に敏感でなければ、と思います。

未解決の女の問題は、もちろんまだまだ山積しています。が、いま日本で一番大きな差別は沖縄差別でしょう。日米安保と沖縄差別がどんなに深い関わりがあるか知って頂きたくて、今日は映画を持ってきました。差別に対して本当にたたかえるのは、差別の痛みを知っている人たちだと思います。解放され、力を持った女たちが、今こそ、その力で立ち上がる時ではないのでしょうか。

●講演●

## 分権時代と地方議員への期待

富野暉一郎

今日は、私たちは今どういう時代に生きているのか、地方自治はこれからどういう役割を果たしているのか、その中で地方議員の皆さんがどういう仕事や役割を期待されているのか、お話ししたいと思います。

### 日本のあり方そのものを変えないと不況は解決しない

今は、非常に先が見えない時代だと言われていますね。例えば、今ある意味では画期的な地方分権が進んでいますけども、しかし、地方自治体は元気か、と言いますと非常に暗いですね、分権を受け止めて、さあこれからこういうふうにやってやるぞ、という元気な自治体は、私の見るところ非常に少ないです。むしろどういうふうに分権を受け止めてどうしたらこなしていけるか、不安な受け止め方が非常に強い。しかも、それを市民自治の中でどのように展開していこうかという意志は非常に弱くて、地域社会側から見ると、何のための分権なのか、具体的に何が起きるのかということについて、難しい事ば

かり考えられていて、明るい展望が全く見えない。

それからもう一つは、世界はどうなってしまうのか。これもやはりなかなか見えないわけです。冷戦が終わった時に軍縮があつて、世界はよりよくなるのではないかと言われたが、とんでもない話でありまして、今世界は、混乱の中に置かれています。アメリカの一極支配もできるはずがない。その中で、どういう社会になってしまうのか、私たちの生活はどういうふうになってしまうのか、これも見えないと言われています。国もそうですね。今不景気だと言われていますが、しかし、日本のこの不景気は、構造的なものと言うよりも、構造が崩壊したために起きた一つの社会現象ととらえるべきだと思ふんです。これは単なる景気対策よりも、むしろ日本のあり方そのものが変わっていかなくては解決できない、と言われているながら、じゃあどうしたらいいのか、なかなか出てこない。むしろ失業率が高いので景気対策をやれとか、地域振興券を配れとか、とにかく消費を上げるといわれているんですね。果たしてなにか大事な事が抜けてないかと、皆さん、非常に不安に思っているんじゃないか。これは、すべての人が意識していると思ふんです。

## 今は「グローバル」な時代

地方議会においても、私たちが、何を目標にして、何を作っていたらいいのか、見えないと思つていらっしゃる人が大勢多いと思います。実はそんなことでいいのかというのが、今日のメインテーマなんです。私たちは地域の中から何を作り出していくのか、地域から世界をどういうふうに変えていったらいいのか。自分たちが地域を作り、自分たちが世界を作り直していくために、何をどう考え、何をどう

理解し、分析していくか、こういうことが問われている。誰かさんが作ってくれるのを待っている時代ではないんだということを、皆さんとともに考えていきたいと思っっているわけです。そして、それを考える中で、手がかりは確実にあるんです。

今まで自治というのは、国家と地方自治体、国と地方、あるいは地域と地方行政というかたちで、非常に狭い範囲、いわばマイナー政治ですね。しかし、今や世界の構造はそうではなく、世界全体と地域はお互いに影響しあいながらダイナミックに動いていく時代になっている。私はそれをグローバルとローカルを組み合わせて「グローバル」と呼んでいます。世界で考えた事を地域で行動する、あるいは地域で考えた事を世界で展開する。世界の政治、経済、あらゆる構造がグローバルではなくてグローバルになっていることを、まず我々は認識しなければならない。

例えば、世界経済の自由化で中山間地の農業が壊滅すると、国が守れなかったのだから仕方がない、地域社会は被害者である、とよく言いますね。こういうことを言っているだけでは、我々は単なる被害意識に終わってしまつて、世界を作り変えていく力を持ちようがないわけですね。世界の側から市場経済という波が押し寄せてきて、地域の公共性が壊されたら、我々は地域で活動して地域から発信し、世界のあり方をどこでどういう風に変えていくことができるだろうか。

市場経済にはいろんな面があります。例えば、中心商店街は、大型店の規制が緩くなつていくことによつて、どんどん寂れていく。町の中心地域にいる高齢者の方が郊外までタクシーを使つて買い物に行かなければならない、これは単に流通がそういうふうになつてきたから仕方がない、私たちにはどうしようもない現象なのか、地方の人たちはそう言つてしまつていいのか、そうじゃないだろうと思うんです。地域の問題をグローバルな問題と切り離してはいけません。グローバルがそうであり、国がそう

であればあるほど、我々は地域の側からグローバルの行き過ぎを押し戻していく力を持たなくてはなりません。私たちは被害者なんだと言うだけではすまない。私たちは別の価値を創設し、別の連帯を作り出し、別の世界を作っていくことが必要なんです。

今いわれているグローバルという言葉は、間違つて使われている。私たち自身が世界に対して何もできないという意識を植え付けすぎてしまっている。そうではないはずです。地域は依然として地域であり、地域の生活を守るということは、グローバルな全体を守っていくことに通じるのです。環境問題と同じような構造は、政治、経済、あらゆるところにあるんだと、この認識を持たなければなりません。

## 国際貢献の手がかりは自治体外交

私たちが今、自治の課題として持つものの一つは、自治体外交ですね。世界が外から私たちの地域に對していろいろな影響を与えている。私たちは地域から世界に對してどのような働きかけをするか、どのような国際活動をするか、どのような自治体のネットワークを作つて国際世論を形成していくか、このような問題があります。これは、抽象的な問題ではありません。たとえば今ヨーロッパでは、地域に根差した社会開発、地域開発というコンセプトがあります。これは、要するに国家がいくら国際社会でODAなどの大きな投資をしても、地域社会の中で自律して生きていくくみを自分たちで作らない限り、社会の構造は変わらないということです。自分たちの力で生きていく地域を作っていくためには、地域同士のノウハウの交換や相互協力が必要です。地域同士の連帯を作っていくことが、将来的には、国家間の国際協力よりも、世界全体の民政の安定に重要な働きをすることになる。具体的には衛生や教

育、あるいは環境、またあらゆる生活に直結した技術やノウハウなど、民政の安定を達成する手段を供給することになるんです。

日本の国際貢献ということはよく言われますけど、国際社会では、「日本に軍事力で世界を平和にしてくれることを期待する」なんて、ほとんど言われませんね。要するに、普通の国としてそれなりの付き合いをするっていう意味では、軍隊を出すことを日本に要求する部分があるかもしれませんが、実は日本に一番期待されているのは経済力であり、ノウハウであり、そして、技術力なんです。

日本の自治体は、多くのマスコミや皆さん自身も思っているような、質の低い自治体ではありません。国際社会の中でも、日本の自治体はおそらくトップクラスの行政能力を持っています。税金をきちっと徴収して、公平に分配することから始まって、地域管理にしろ、教育にしろ、非常に高いレベルの行政水準を、日本の自治体は確実に保っています。人びとを幸福にし、地域を安定化するために、世界中でもトップクラスの役割を果たしているのですね。そして、トップクラスの人材を持ち、トップクラスのノウハウを持っている。自治体の実力が、日本人の顔が見える小さな国際貢献として、NGOや市民とともに国際社会に展開すること、これは自治体外交、自治体の国際協力、国際連合の言葉では、MIC（＝Municipal International Cooperation）と言います。もし、日本の自治体の本気になってやれば、日本政府のODAよりもはるかに大きい国際貢献、平和貢献ができる。それによって日本は、世界の中でなくてはならない国になる。これは日本の国家としての安全保障だけでなく、私たち自身の安全保障につながるんです。

今はもう総合安全保障の時代に到達している。特に二十一世紀は、軍事力だけでは明らかに世界は平和にならないということは、もう十分にわかっているわけですね。だとしたら、平和作りや民生の安定

を国家に任せるのではなくて、私たち自身の安全保障の問題として、問題提起し、活動していくと、こういう自治体のあり方が、問われていると思うわけです。日本は決して、この分野では世界に遅れてはいません。NGOは日本は非常に遅れていますけども、日本の自治体はヨーロッパの自治体と比べて遜色がない国際協力活動を実際やっていますね。まだまだ数少ない自治体ではありますが、今すでにそういう具体例を持っている。そういう国際社会とのかかわりを、私たちは現実到现在できる課題としてやっていかなければいけないと思うんです。

## 財政ばかりに目が向いて政策が衰弱している自治体

もう一つは、日本の自治体の中で今非常に問題となっている地方分権です。この分権はどうしてもしなくてはいけない。私たちが地域の中できちっとした生活を構築し人生を豊かに過ごすためには、地方自治、地方分権は非常に大事なものです。今回の分権は機関委任事務が廃止されるという、画期的な分権です。もちろんいろんな批判がありますし、いろいろ限界がありますが、非常に画期的であることは間違いない。にもかかわらず、先ほど言ったように、自治体は元氣が出ないわけですね。それは今非常に財政が苦しいなかで、自治体の目は財政問題ばかりに向いてしまつて、政策問題が比較的弱くなつてしまつているからだと思ひます。

その典型が介護保険の問題ですね、介護保険は必要な制度ですが、いろんな問題があります。私は介護保険の一番大きな問題は、あるところで線を引いて切つてしまうことだと思います。介護保険が受けられる人、受けられない人がはっきりと分かれてしまうのです。しかし、人間のハンディ、障害につい

ては、福祉が必要な条件はある線から上は100で下は0ということはありえない。つまり、グレイな領域が存在しているわけです。問題は、介護保険というのは、切られた人はいっさい面倒を見てもらえないということです。切られた人を地域でどうやって支えるのかということが、実は介護保険で地域にとつては一番本質的で大事な課題なんです。ほとんど議論されていないですね。制度で保障される人たちはまだ、いろいろな批判があつてもいいんですね。しかし、制度で保障されないところは地域で支えるしかない、そのことについて、政策的思考が全くない現実を見ると、私はやはり今、地方行政は非常に貧弱化、弱体化していると思います。議会もそういう機能を果たしてない。それは全国的なものじゃないかと思うんです。

## あふれる市民のパワーが地域を動かす

しかし、地方自治そのものが沈滞化しているのか。決してそんなことはないですね。地方自治は今、私は活火山だと思っているんです。市民の目からみたらどうでしょう。十五年近く前、私が逗子市長になつた時に住民投票をやる話がありました。その当時は住民投票は夢のまた夢だということでしたが、私は決してそうじゃないと思って、三回も住民投票を議会に持ち込んだんですけれど、しかし、できなかったですね。しかし九〇年代に入つて、住民投票は一転して新潟の巻町や沖縄の名護市などで行なわれるようになりました。それ以後、地方自治法が変わろうが変わるまいが、どんなものがあつてもそれを求める住民の動きは止められないという状況ですね。そして、その市民の選択によつて構築された状況が、日本を根底から変えようとしている。地方自治行政が沈滞し、地方行政の政策化が非常に沈滞してい



る中で、住民や市民の動きは非常に力を持って日本の社会を変えようとしているのです。

これは住民投票だけではありません。例えば情報公開問題でもどうでしょうか。交際費の公開についても、例えば六、七年前だったら裁判所があんなに情報公開決定を出すなんて考えられなかったですね。しかし、市民オンブズマンは行政から疎んじられながら、とにかく繰り返し繰り返し訴訟しました。訴訟の中からいかに行政がそういうことについていいかげんであるか、反市民的であるか、そして、市民から離れた所にあるか、ということを見えにきた結果、もし行政がこのままでいたら、日本のシステムは明らかに崩壊するということが見えてきたからこそ、判決も動いていかざるをえなかった。これは、非常に画期的ですね。行政が自ら開いていったんじゃなくて、市民がこじ開けていった。そして、行政に弱いと言われていた日本の司法も、その流れの一端を担わざるを得なくなった。

豊島の産廃問題も、明らかにそうです。あれは、今までだったら、行政が手続きどおりやったことがなぜ責められなければならないか。手続きどおりやれば違法性がない、違法性がないのに行政は責められない。こういう論法だったはずですね。しかし、どんなに合法的にやったとしても、具体的に住民に被害を与え、生活を破壊するのであれば、地方自治体は対処しなければいけない。未だに香川県は抵抗していますけども、しかし、現状回復までいったことは、まさに住民のパワー以外のなものでもないというわけです。

皆さんのように市民派議員、市民自身が活動して地域を変え、地域を豊かにしていかなければいかんという人たちは全国にたくさんいます。しかし、その人たちは常に議会では少数派です。今の議会の多数派は、行政の多くの人たちと同じように、地域をコントロールするのは行政であり、住民は啓発し指導する対象であると思っている人たちです。この大きなギャップは何なんだろう。行政というものが

市民から離れてしまっています。しかし、戦後五十年が経って、一人一人が自らが知り、判断し、行動するのが当たり前なんだという知識や意志を持った住民が、もう日本全国である堰を満たすところまできてしまっている。そして、住民投票や情報公開などに動きはじめています。こう理解すべきでないか。日本の戦後民主主義を作り出してきた市民の力は、決していいかげんなものではないし、そんな弱いものでもない。そして、今その堰はまさに満杯になろうとしている。この時期に統一地方選があるわけです。地域の中でもすごい住民のパワーが現実の地域社会を動かしている。日本全国で、大きな自治体や先進的だと言われている自治体よりも、むしろはるかに先進的ではないと思われた地域、そして、非常に硬い保守の地盤であったような地域で人びとが動き、その地域を動かしてしまっている。この現実をどう見るか、地域のパワーをどう理解して、私たちのものとして全体的に展開するか、二十一世紀への転換をいかに実現するか、ということだと思っんですね。

今回の地方選挙はまさにそういう選挙として、私たちは投票しなければいけないのではないかと。だからこそ、この〈虹と緑の500人リスト〉は、イデオロギーや政党にしばられずに、日本の現状に対する理解、あるいは市民や住民のパワーをいかに理解し、いかに政策化するか、そして、その中で地域自らが生きていく指針をどうやって作っていくか、という問題意識で結びついていると思います。今がターニングポイントだと思います。

私は日本の現状は決して悲観すべきものではないと思っています。中央集権の殻を破るのが、一番難しいのは国家だと思っています。国家はまさに日本全体をコントロールし、官僚を育て、あらゆるシステムを作ってきた。しかし、中央集権のいろんなしがらみなどによって飼いやられてきましたけれども、地方では今、そういう殻を打ち破って、新しい理念、新しい動きが出てきた。そういう状況になりつつ

ある。地方こそ、殻を破りやすいところです。

## 地方自治体で必要なのは独自の産業政策

今や東京は人口吸収力を失いました。国勢調査で初めて確認されたことですが、人口逆流現象が起きていますね、これからはむしろ選択的に、質の高い雇用や、質の高い生活ができる地方自治体に、大都会から選択的に流入する時代ですね、平等に帰ってはいけません。魅力のある、良い雇用のある、そして、いい生活が保障できる地域に人びとが帰って行くわけです。首都機能をどこかに移動させなくても、東京の人口吸収力が自動的に落ちてきて逆流していますから、そんな問題については、政府は全く政策を作らなくても、問題解決できるでしょう。むしろ、地方の側で流入する人びとをどのように受け入れて、新しい地域社会をどのように作っていくか、政策作りが求められている段階です。

その政策は何なのか。基本的には「環境が良いからきてくれ」では駄目ですね。この地域は環境が良い、だからそれが売り物だということ、あれはうそですね。日本全国、地方は大体環境は良い。当たり前のことです。環境が良いというのは基礎なんですね、その上に何を構築して地方の魅力をつくっていくかという、私はむしろ産業政策ではないかと思えます。つまり、良質な雇用ですね。今までの日本の産業や工業と違った新しい産業システムをどのように地域に独自のものとして作っていくか。例えば、アジアや世界の今後に貢献ができるような産業をつくることです。

このような地域産業ネットワークの作り方についてかなりしっかり考えないと、リゾート法だとか、工業団地を作るとか、要するに国家の政策によって、国家の資金が地方公共事業としていかなければ、

地域振興ができないという受け身の地方政策になってしまふ、こういう意味でも地方の政策作りは、非常に微妙な段階になっていますね。地方自治体や都道府県は基本的に産業政策が弱かった。しかし、もはや国家の産業政策を受けて地域が産業政策を打ち出す時代ではありません。人口が逆流する時代は、地域そのものの独自の雇用を作っていく、そのためにどういう産業政策をとるかということが問われている。そういうことを全体として考えると、まさに今よく言われている「政策の時代」なんですね。

## 高度行政より最適行政を

しかし、「政策の時代」は誤解されているのではないかと思うんです。地方自治体学会、地方行政学会などでは、これから分権になって非常に仕事が大変になる、だから地方の職員が非常にレベルの高い政策形成をやらなければならないと言われていますが、私はこれにはいささか懐疑的です。今まで、政策中心の行政とか言われて、非常にきらびやかな文化施設とか、その地域の文化レベルとははるかに違っているような施設とか、地域の住民が使えなくて人を呼んで、呼んだ人たちが使う施設だとか、こういうものが多いですね。住民自身の手の中にない政策が高度な政策として考えられていくなかで、行政はものすごく偉くなつてしまつたんですね。だから今は高度行政より、むしろ適正な住民との関係によって運営される「最適行政」が必要です。つまり住民の手の中にあるような政策をいかに社会的に展開していくかということです。

行政計画といった言葉があります。福祉の行政計画等と言いますね。もちろん必要です。しかし、もっと必要なのは社会計画なのではないか。行政計画は社会計画の中の一部に過ぎないはず。ところが

日本の場合には官僚支配が強いために、行政計画が社会計画を被い尽くしている。本当にその行政は市民の手の中にあるのか、そういう行政や政策によってできたいろいろな施設は、果たして本当に市民が使えるような施設なのか、市民が理解できるような予算の組み立て方になっているのか、そういう結果として責任は取れているか。実は今みんな財政的に破綻して、責任も取っていないのです。

今までの政策行政は、ある意味ではバブルであつた。なにか非常に高度なものを作る。市民の考えているものから、はるかにレベルの高いものを作らなければならないという行政でした。しかし今や、市民のレベルは、文化的にも、情報の面からいっても、そんなに低くありません。一人一人は各企業の専門家として勤務している専門家集団ですね、そういう点から考えても、行政はもはや高度行政をやる時代ではない、市民に立脚した最適行政をやる時代になっていると考えているわけです。

## 「公」は行政、「共」は市民が受け持つ体制に

そのような現状認識に基づいて、私たちはこれからどういうことを政策のポイントとして考えていかなくてはいけないか。

地方がこれから持つ機能、公共性の原理はどこへいつてしまうのか。公共性は最終的には世界的な市場原理に飲み込まれてしまうのか。地域的連帯、社会的連帯というのは、そういう市場原理の中でしか存在できないのか。こういう問題があると思うんです。しかし、国家レベルは別として、地域では市場原理だけでは皆生きていけない、これは当然良くわかつていることです。

地域社会、地域の自治を考えた場合、これから私たちがまさに大きな流れとして持っていかなければ

いけないのは、公共性原理、あるいは連帯原理、共生原理というものです。他のものとながつて、人間だけではなく自然ともつながり、地域だけではなく世界のいろいろな人びととともに、連帯し、共生にいくことはどうしたら実現できるのか。そういう「共」の原理をいかに実現できるのか、具体的な政策として展開できるのか。それが最も大きな課題になるであろうと思います。そうなってくると今の地域社会は組み立て直した方がいいだろうということです。

どういふことかといいますと、公共とは「官」という意味を持つひとつの言葉でした。地方公共団体とか、公共事業とか。しかし、これはうそで、実は公共＝公＋共なんです。公というのは権力です。税金を強制的に取って、個人ではできないことをする。例えば住民を強制的に退かしてまち作りをする、こういう権力の縦軸なんですね。では共というのは何でしょうか。公という縦軸と共という横軸、その両方を官が持つてしまったのが、明治以後の日本の中央集権制です。しかし、地域社会にあつては公の原理は行政権力が持ち、共という連帯原理は地域社会の人びとの側にあつて、初めて公共空間が機能する。それが市民社会です。

日本が市民社会になつていないのは、まさに共の部分が機能していないからです。官が全部共を持つてしまった。あるいは、我々国民は官に共を全部要求してやらせてしまった。高度成長社会の中で、行政も共の部分を吸収してやつてしまった。だから依存型の住民であり、無責任な住民になつてしまう。連帯はしないで、個々人がバラバラに上を向いて要求し、批判する。結局、批判者、評論家になつてしまつて、自分たちは実行できない、こういう地域社会になつてゐる。

これを改めるためには、共を住民の方に取りもどさなければならぬ。今、行政がやっている公共の仕事、公と共にきちつと分けて共を市民に返してやるということです。今、行政がやっている仕事の

共の部分で、市民が受け止めてする形ですね。ここではまさにNPOが受け皿になるんです。行政は公と共を分離して、公の方へスリム化して、共は地域の連帯として機能する。そうしなければ、日本には市民社会は存在できないのです。つまり地域社会の組み替えをやらなければいけない。

## 分権の次の時代も視野に入れて、地域が憲法を持とう

もう一つは、国が憲法を持っているように、地域も憲法を持たなくてはいけない、つまり都市憲章です。これが次の分権の課題になってくるでしょう。それから、地方分権の推進を受けた合併問題が出てきていますけれども、私はこれに直線的にいくのは危ないと思います。分権の受け皿は合併だけが選択肢なのか、そうではないですね。むしろ選択的自治という言葉が必要なのではないか。これは、広域行政と狭域行政と組み合わせで、自由にいろんな連合体を選択して、最適行政をすることです。選択的自治によって、地域が自由に連合を組みながら行政需要に対応し、その結果として合併が浮上してくればいいけれども、そうでなければ合併はむしろ危険である。こういう選択的自治をどうやって地域に根づかせるかが問題です。

また、都道府県はこの次の分権では必ずなくなると思います。つまり、道州制ないし、連邦制ということが必ず問われると思うわけですね。その時に基礎自治体はどうするのか、基礎自治体はどういうような機能を持てばいいのか、地方自治体から考えて、都道府県制はどういうふうにしたらよいのでしょうか。これは皆さんも実感されているところもあるかもしれません。これから次の分権に向けて、まず、私たちの地域にはどのような広域行政が、地域主権が必要なのか、そのなかで都道府県制をどうするの

かを考えていくことが必要ではないかと思うんです。

## 「風」を感じさせる政治を

私たちの中には、暗い顔をしている人がどうも少し多いような気がする。特に議員さんって事態を深刻に考えすぎて、そのために暗くなっちゃうんですね。だけど、まじめなだけで政治ができると私は思いませんね。やっぱり豊かなもの、楽しいもの、ちょっとホンワカしたもの、人びとがこれで自分たちは生きられるというもの、そういうものを感じさせる、あるいは風を感じさせる、そういうのが政治だと思うんですね、まずまじめに考えて、その次に希望を持って、我々はどこに希望の根拠があるのかということをしっかりとらえて、とにかくそこから歩み出すと。歩み出すために私たちは、一般の市民という非常に大きな広い海を持っているわけでありますから、決して悲観することはないし、弱気になる必要はない。

現代社会にはいろんな問題がありますが、その中で、地方議会はそういう問題を真正面から受け止めて、積極的に社会改革を提案していかなくてはいけない。そういう事について、果たして皆さんがどういうことを地域の中で、住民に対して発信できるか、それが問われているのです。そのための勉強の機会、そのためのネットワークがこの500人リストであると私は理解していますので、そういう方向に向けてぜひがんばっていただきたいと思います。

(島根大学教授)



# 虹と緑に期待するもの

## ——地方議員が果たす政治改革

石川 真澄

私はもともとの商売が新聞記者。しかも悪名高き政治記者ですので、どうしても東京永田町あたりを中心にうろろろしているという習性みたいなものがありまして、国の政治から目を離せないですね。気にするなと叱られそうなんですが、どうも気になります。

### 自自連立で議論されたことの中身は

たとえば、自民党と自由党の自自連立政権ができて、政権の安定だなんて言っているけれども、自由党はもともと自民党で、その右寄り分子、とにかく理屈つけてもとのさやに収まりたい。自自連立なんていうのはもう、それだけの事です。だから、そう大きな屁理屈くつつけたってしょうがない話なんです、せめて、そのカッコ付けのための政策論議というのがありました。周辺事態法、これは意見一致なんでしょう。あまり議論しなかった。迷惑を受ける私たちとしてはいろいろと文句あるんですが、一応それでこのことは落ち着きました。一番問題になったのは、閣僚の数を減らせとか、政府委員を無く

してしまおうとか、衆参両院議員を五十人ずつ減らそうとか、そういう話ですね。

私は議員の数を減らせというのには猛然と反対をしている。しかし、世間一般の方々は、国会議員なんてのは、ろくでもない野郎ばかりで、銭食い虫で、しかもつまない事ばかりしているのだから、一人でも減ったほうがいい。国費の無駄遣いだということで、減らすのには賛成なんです。私も時々講演の時に、議員の数を減らせというのには反対だ、むしろ増やさなければいけない、特に自治体の議員なんていうのは、軒並み法定された議員数よりはるかに少なくなっているのだから、もっと増えなければだめだなんて懸命に言うんですが、議員さんだけがうなずいてくれる。一般の聴衆は大体八割から九五%ぐらいが減らせというほうですね。ですから、こういうのはきつと、評判がいいんでしょう。

政府委員というのは役人、官僚ですね。役人がしゃしゃり出てきて、中には、「これは重要な問題でありますから、担当の局長に答弁させます」なんていう大臣もいる。そういうアホな政治家がずっと役人を飼ってきた。それをやめて、政治家が責任を持つて答弁をしろ、というのもまあいいですね、私たちもしばしばそういうことを言っていました。大臣も二十人いなければいけないという人は、まずいないでしょうから、大臣を減らすのも結構。しかし、昨年の十二月に連立の話が始まって、政権政党、大連立与党を作つてこれから強力な政治を行なつていこうと談じている時に、それが話題か……という感じはありますね。私は非常に不愉快です。もっと大事な事がいっぱいあるだろうが、ということですね。二言めには景氣の話だ。でも、景氣の話というのは、あつていいんです。皆さん方がいろんな市民と会つて話をしている時に、商売している人がいたりすれば「どうかね、この頃少しは上向いてきたか」という話を必ずするに違いないですね。国民的大関心事は依然として経済の状況だということであるならば、これから政治を運営していく自民党と自由党はその話をやっぱりするべきです。予算編成がすん

で大蔵省の原案ができたから、もう後はする事はない、財界にお任せだ。財界の方も「政治はようやくやった、俺たちがこれからがんばるんだ」なんて事を言っているけれども、本當かいな、ということですね。

## 消費税も年金も医療費も……不安なことが話題にのほらない連立政権

自由党は二言めには、安心とか安全とか言いますが、いったい、消費税を当分凍結するって言っていたのはどうなったのか、そうかと思えば前は一〇％にするって言ってたけど、どっちが本當なのと言いたいですね。今度自民党と一緒にするんだから、消費税はいつまで五％なのか、これから下げるのか、それとも上げるのかというような話は、やっぱり皆関心がある。年寄りから見ると、少しずつ爪に火をともして貯めてきたお金が、バブル経済の頃には年利五％は大丈夫だから、贅沢かもしれないけど、年に一ぺんぐらい海外旅行にこの金利で行けるかな……なんて思ったら、今は全然とんでもないお話で、視力検査表くらいの利子しかつかない、一体、どういう事なんだと。私は相當な近眼で視力〇・二なんですけども、その程度以下ですね。それからご承知のとおり、若い人たちは年金は払っても、もらえそうもない。私なんかもう、もらっちゃったからいい気分ですが、我が息子や娘のことを思うとね。お前さんたちが収める錢で俺は養ってもらうんだけど、お前さんたちはどうも期待ができないみたいだよ……みたいな話は、やっぱりあんまり嬉しくありませんね。娘や息子や孫のことを考えれば、自分がもらえてもウハウハ言つてられない。

医療費もちろんそうです。医療費の自己負担が増えて、この先病氣になったらちよつとやさつとの貯金ではだめだとみんな思っている。あるいは安全性ということでは、市民派議員の皆さん方

が毎日毎日懸命に取り組んでおられるきれいな水やきれいな空気はいったいどうなっちゃうのとか、食品の安全とか、それからもちろん大地震だとか。これらはマスコミも話題にするし、我々も年じゅう気にしていて、耳にたこができるほどのものなんです。残念ながら、それが一つもこの政権を期する時に話題にならないんですね。

## 議員削減は本当にいいことなのか

与党なんてそんなに信用できるかと言ったって、残念ながら日本の議会制民主主義のもとでは、それは国民多数が支持したということになってしまふ。いかに私は小選挙区制反対だ、作られた多数派だ、なんてワイワイ言っても、制度上仕方がない。では野党はどうしているかというと、野党もそれにのっているだけですね、今日も国会中継を聞いていたら、「周辺事態法を予算を上げてからやれ」とか、「報告を『承認』にしろ」とかという程度の話で目を三角にしている。もつとほかに言うことがあるだろうにと思うんですが、言っていない。まあ、共産党が時々ちらほら言っていますがね。日本の政治は政党政治ですが、中央政治は特に、政党政治を担う政党というものに信用はおけない。私は中央の政治というものに目を向ければ向けるほど、こりゃあいかんね、これはだめだわ、ということばかりです。

もし代議士を五十人減らすと、どのくらい経費削減できるかというと、代議士一人にかかる費用は、年間七千万円くらいだそうです。これが仮に一億だとしたって、五十億円。ちなみにF14戦闘機は一機九十六億円です。議員を減らせばいいじゃないかと言っても、例えば、アフリカで苦勞している〈国境無き医師団〉に九十六億円出せば、何十万、何百万という瀕死の子どもたちが生き残れる。その場合百

億円といえ、べらぼうなお金だと思いますね。そういうことに出すというなら、まあ、許してやるかと。でも、そんなことは絶対にやらない。必ずそれは戦闘機を一機増やすほうに回すに違いない。そういう不信任感。そんなことで我々の代表の数を減らすことのほうが万歳などと到底言えないじゃないかという議論をすればいいんですが。

この間、ある新聞の社説を見てたら、減らすということだけは賛成だ、と書いてありますね。比例区で減らすというのはおかしいが、そもそも議員を減らすというのには賛成だと。国際的に見て、日本の国会議員の数は多いほうではない。「しかし」とある。多いほうでないが減らさなければならぬ理由を「しかし」の後に書いてあるかと読んでいくと「どの党も賛成している」……世界との比較と、どこが関係あるんでしょうね。

## 少数派だからこそ値打ちがある

この〈虹と緑の500人リスト〉の中には、政党の関係者もいらつしやるかもしれませんが。私が今住んでる新潟の〈市民新党にいがた〉には変な人ばかりいて、例えば綱領みたいのがあって、読んでみると「二重国籍を認める」なんてある。どの党の所属でも結構だという言い方をしていますから、既成政党の党員の方もいらつしやるんでしょう。もちろんいても結構ですが、その方にもあえて言いたいけども、だめですよ、日本の政党。ろくな事はない。

私が一生懸命に〈虹と緑の500人リスト〉に期待をよせているのは、ひょっとしたら皆様方に期待するというよりは、実は反動ですね笑。この汚い、嫌な、駄目な政党をながながと見てきて、時にはある

政党に期待をよせたり、政党の中のいくらかマシらしい奴にちよつと期待をかけてみるかと思つたりしたけれども、ことごとくいけません。本当に暗い。暗いからわずかに細々とした明るい灯をともしたい。「細々とで悪いですね」と怒られそうですが、細々とした灯は皆さん方だと思ふんです。なぜ皆さん方かと言つたら、「俺と二緒だから」です。ものの見方、感じ方、生き方は、大体皆さん方は私にぴつたりだという方々ばかりだと思ひます。中でも一番びつたりしているのは、実はたいてい一人が多くて二人ぐらいではありませんか。皆さん方、これから議會の中で仮に想定したとしても、ひどい少数派です(笑)。もう可哀相なくらい。寂しい。でも、そういう人たちが、どうしても要るんです、実は。駄目になつた政党や、政党以前からの地元のボスみたいな連中だけがふんぞりかえつていような議會の中で、どうしても必要なのは皆さん方。労働組合の利益なんかだけで熱心になつたりする「革新」の馬脚が現れてしまつた今となつては、皆さん方しか実はいない。しかもそれは、ひよつとしたら一人か二人しかないといふことの値打ちなんじゃないかとさへ思ひます。だいたい民主主義といふのは人間不信の政治なんです、皆さん方はやつぱり一人か二人ぐらいしかいない間が輝いている(笑)。一人でもいい。「百万人行かずともわれ行かん」とか、「どうせ俺はもう嫌われもんよ」といふような奴とかね。おそろく過半数になると、きつと同じように絶対駄目になると思ひます。それが残念ながら我々みたいな凡俗の悲しい性かもしれません。

## 「奇人・変人」が世の中を変える

この間、福岡の裁判所で「丸刈りは社会通念だから、それを学校が強制しても憲法違反ではない」と

いう判決を出したんですね。まだ社会通念なんですかね、丸坊主は。そういう国に住んでいるということが本当に寂しくなりますね。勉強ができて司法試験に通った奴らがそんなこと言っている。私は勉強できなかったから安心して言えるんだけど、そういう社会通念の圧力みたいなものに平気でコロコロいってしまうような世の中では、少々社会通念に逆らうくらいの変人・奇人は貴重ですね。自民党はだめですよ。自民党だと「凡人、軍人、変人」の中でやっぱり凡人が一番人氣が高くなっている。すごいですね。だけど、あの中の変人も大した変人じゃない。本物の変人というのは我が《虹と緑》の中にいるというくらいの気持ちを持って、たまには暗い顔しているかもしれないけど、そういう人たちが一生懸命議会の中で暴れることによって、それに議会が耳を傾けることもあるだろう。あるいは住民も「あいつは変な奴だ」と思っていたけど、やっぱり、考えてみればあいつの言ったとおりじゃないか、あいつの言っているような方向にいったほうがいいんじゃないか」と思ってくれる人が、五人十人百人というように必ず増えていくに違いない。そういう種類の変人というのが、まだまだ日本社会には非常に大切である、と私は思わざるをえません。

《市民新党にいがた》の山田君って面白い奴で、「この頃市議会で飲み会があつても、コンパニオンを呼ばなくなつたよ」と言うんですね。「みんな俺のほう向いて呼ばなくなっちゃったよ。俺、コンパニオンだめって言つた覚えはないんだけど、あの野郎また何か言うに違いねえ、つて思われたのかな」つて。

そんな嫌われもんが、今こんなにたくさん集まっている。皆さん方は多数派にきつとならない。ただ、ここに来てみるとこんなにいる。日本全国に何百人もいる。元氣づけがこのリストを作る最大の意味だと思ひます。常識に押しつぶされそうな世の中で、常識的ボスども、常識的革新みたいな連中ではない仲間がこんなにいるぞ、というために、このリストが本当に生き生きと動いていくことが一番いいと思つ

ています。私は皆さん方が全国の多数派になる訳もないし、地域の多数派になったらおしまいだと思っている。そういう点ではあんまり元気づけにならないかもしれないかもしれませんが、だからこそ皆さんの役割が今や非常に大事だと思っています。

## 国家は出るべきところだけ出てほしい

先ほどの富野さんのお話で国家の役割が出てまいりました。私は現状を見てまして、実は、国家が出るべきでない所に出てきて、出なくてはいけないところから、いなくなりつつあることのほうが、今の日本という国家がもっている問題ではないか、というふうに思っています。

本来、国家というものは、皆さん方のような実際に活動される方々にとっては、とにかく排除したい、余計な口出しをするなという対象でありつつありましたけども、しかしながら、国家の役割というのはやはりあるんじゃないかと、むしろ今は痛切に思われているのではないのでしょうか。

最近の雑誌で「おっ」と思った記事ですが、今の現在の不況は「厚生省不況」だと言うんですね。なぜかという、人びとが消費に金を使わないのは将来に不安があるからだ。老後の不安があり、病気になる時の不安があるから、皆、減税があるうが、月給が出ようが、ボーナスが出ようが、みんなため込んだ買って、ものを買わない。商品券やなにかを使った所でたかがしれているんで、本当の消費刺激にはならない。結局は老後の不安を取り除く厚生省がちゃんとやっていかないと、真の不況打開にはならない、という趣旨の特集でした。これが当たっているかどうかは、私は経済の専門家ではないのでわかりませんが、しかし、考えてみれば、たとえば規制緩和とかいう言い方のもので、もちろん緩和しな



ければならない規制もあることは、皆さん方もご存じのはずですが、まさに今の国家というのはそういう部分から、少しずつ巧妙に立ち去ろうとしているのだらうと思います。

日本国憲法の中には「公共の福祉に反しない限り」、つまり「公共の福祉によって制限ができる」という文章が明記してあるのは、財産権の部分と、職業選択の自由の部分だけで、基本的人権のところには、例えば言論の自由、信教の自由などには公共の福祉を名目に制限するということが全く書かれていない。それは何を意味しているのかというと、「経済的な面についてならば、公共の福祉の名の下に、制限をつけることができる」ということを憲法は予定している」という意味だそうです。そういうふうを考えるならば、経済、あるいは資本という部分については、国家こそが制限を加えるべきものです。しかし、当然なさねばならないその部分から、日本国家は逃げ出していきつつある。なさねばならない事はやらないうで、余計な事では出てくるんですね。国のためとか、国家・国民のためとか。国民は付け足して、国家・国民と一つの対語にしてやたら国家が出てくる。日の丸・君が代も、周辺事態法もそうだし、盗聴法も暴力から国を守るためだそうです。そういう余計なところにはばかり国家、国家と言いだして、当然出なきゃならない所に出てないじゃないかと考えます。

## 恐ろしいのは「普通の人たち」からの保守的な圧力

こういう状況の中で、生き生きと活躍してほしい少数派の皆様方が、いま一番ひしひしと感じて「まいったな」と落ち込んでいくのは、おそらく自分と同じ顔をしている民の側、いわゆる普通の人たちが、実は「やっぱり、天皇さんは拝まなくてははいけない」と思っているし、正月の一般参賀にはぞろぞ

ろと出ていくし、補助金はたくさん持つてきてほしいし、飛行場は近くに在ったほうがいいと思つてゐる……という人たちだということでしょう。子どもたちは制服を着て学校へ行くのがいい駄で、丸坊主のほうがいいと気持ちがいい、たまには先生になぐつてもらわないと困る、ひよつとしたら教練も復活してくれたほうがいいんじゃないかという人たちがたくさんいて、立つて君が代歌わないなんてとんでもない、国旗が揚がつていく時に敬礼しないなんておかしい、という非常に広範な人びとが、社会的圧力を我々の方に向けている。そのしんどさが皆さん方には特にあるのではないかという気がします。

そういう中だからこそ、私は皆さんに、あえて変人とか、少数派とか、一人ぼっちとか、申し上げるわけです。本当は逃げ出したい、やつぱりラクチンですからね。たくさんの方の所へ行つて、君が代歌つていると心から涙が……なんて、肩叩き合つてゐるほうが氣が楽なのかもしれません。でも、かつて日本はそういう圧力の下に、無謀な、めっちゃくちゃな戦争へ行つてしまつたんだな—ということをやつぱり思わざるを得ない。

## 今こそ「少数派」が重要

住民投票というと、「一般の大衆は一時の興奮に駆られて、何をしてくすかわからない」から、衆愚政治だと悪口を言う奴がいる。その時には直ちに反論します。おまえたちは大丈夫なんかいと。国会議員であるとか、自治体だとか、むずかしい試験を通つた大蔵省の役人だとか、そういう奴は一時の興奮に駆られていい加減なことしないのかと。例えば国会議員は小選挙区制を作つてから、「あれは熱病であつた」と言つてもだめだ。市民を衆愚と悪く言うのなら、おまえたちだって同じことだと。早い話、議員

はその衆愚に選挙されて当選してきたんじゃないかと言います。ただその原理的な民主主義の話のときに、今、現に日本で社会的な圧力としてすでに存在している非常に保守的な雰囲気というものを、きちんと見極めていたほうがいい。したがって、住民投票をいくらあちこちでやったとしても、天皇制廃止を住民投票にかけようなんて言うことは、やっぱりできないわけですね。そういうことを、計りながらやっていく必要がある。私たちは、市民の立場というものにももちろん根本的な軸足を置きながらも、ただ単に多数派、多くの人がこれを望んでいるからというだけの理由によって、ものごとを進めていくことはやっぱりできない。その意味でも、やはり少数派でなければならないと思う場面があるだろう、と思います。

## 沈黙の圧力に対して声を出す覚悟を

私は富野さんと同じバードウォッチャーの一人です。新潟の、いま私のいる所には、佐潟というラムサール条約の指定になったすばらしい湖があって、白鳥が飛んでくるんです。実は、バードウォッチャーにとつては、白鳥は大きくて目立つから見つける楽しみがあんまりないんですが、でも、本当に美しい鳥です。特に夕日を浴びて編隊を組んで飛んでいく時の鳴く声の優しさなんて聞くと、ウットリします。新潟へ来てよかったな—と思います。ところが、私の大学はコシヒカリの田んぼだらけの所にほんとできた新設の小さな大学なんですが、そこを広域農道というのが走っているんですね。農水省は今、お金の使い道がなくなつて道路と飛行場ばかり造っている。造る必要がないのに予算を抱えているもんだから、しょうがなくて造っている。その道路は何の役にたっているかというと、都会から来た暴走族みた

いな僕だけが一人で走って、学生から「先生飛ばしすぎだよ」なんて怒られる。そんな道路を走りながら、周りの田んぼは青々として美しいなと思っていて、はっと気がつく、カエルが一回も鳴いたのを聞いた事がない。カエルが鳴かないんですね。レイチエル・カーソンという人は偉い人だったとしみじみ思いますね。見た目きれいなんですけど、本当に沈黙なんです。カエルの鳴かない田んぼなんて子どもの頃に想像できたかという問題ですね。しかし、そのことを私が新潟県の県庁のお役人に話し、地元のかの機会に言い、いろんなことをしても、反響は一つもありません。賛成しなくてもいい。「そんなこと言っただけで、農薬なしで米作れるかよ」という反論は私も承知していますが、せめて、そのくらいのこと言っただけなのに、全然相手にされません。

これは、私なんかのように、カエルが聞こえてこないことに非常に絶望的な気持ちになる者に対する社会的圧力ですね。何にも声が聞こえてこない。そういう世の中で、私どもが、何かを言ったり、したりしていくことを、覚悟する時が来ている。そのためには、一人だけではあまりにも大変だから、五百人——二百人でもいい。これくらいになれば、少し私たちの声が聴こえる。そして、何かそれに対して反論なり何なりがやってくるんじゃないか。これは私たちのいてもたってもいられない気持ちから出てきたことです。そういうためにも、この500人リストの運動をぜひ成功させていただきたいと願っています。

（新潟国際情報大学教授）

※1999年1月31日（虹と緑の500人リスト）関東ブロック結成集会記念講演から



## 新ガイドラインに女性たちが反対行動

周辺事態法がこの三月にも国会本会議で審議開始、採決されかねない状況に、女性グループは一斉に反対の意思表示。2月25日は、日本婦人団体連合会の榎田ふきさんをはじめ66人の女性呼びかけ人となり、百歳の榎田さんを先頭に銀座でデモ行進。3月9日には日本YWCAの呼びかけで、午後一時半から二時半まで参議院議員会館第一会議室でリレートーク、その後、各自が持ち寄りたりポスターで国会を囲む。記者会見も開いて、女性の意志をマスメディアにアピールする。へ止めよう「戦争協力法」女たちの連絡会も新ガイドライン反対の「女たちの共同アピール」を出して賛同を募っている。国際婦人年連絡会も、反対声明を検討中。揺れ動く民主党と公明党に「賛成すれば女性票を失いますよ」とおどしをかけよう、というねらい。

統一地方選がらみで、各地方でも「地方自治体の道路・

港湾・病院の有事使用に反対！新安保を廃止して憲法九条を守ろう」といううねりが見えはじめている。

## 最高裁が住民票の非嫡出子記載取り消し請求を却下

東京都武蔵野市に住む事実婚のTさん夫妻が、長女の住民票続柄欄に非嫡出子を意味する「子」と記載されたことについて「法の下での平等を保障した憲法に違反する」として武蔵野市と市長を相手に記載取り消しと損害賠償を求める訴訟を起こしてから十一年。今年1月21日、最高裁から突然「原告の上告を棄却する」判決が言い渡された。

第一小法廷では「武蔵野市長は国が決めた規定に従っており、職務上の注意義務を怠ったわけではない」とし、憲法判断に踏み込まずに請求を退けた。判決では「住民票の続柄を書く行為は、訴訟の対象となるような行政処分にはあたらない」と述べて記載の処分取り消しを求める訴えを却下した。また「市町村長は住民基本台帳事務処理要領に従っ

て仕事をするのが求められ、要領改正時まで多くの市町村がこれに従っていた。戸籍法でも非嫡出子を区別して記載していることから考えると、非嫡出子を区別して続柄を書いても住民基本台帳法の解釈を誤ったとは言えない」と、「武蔵野市長の行為に違法はない」との判断を示した。

この判決文の不正さもさることながら、当事者である原告や弁護士にすら判決期日を事前に知らせず、当事者不在の中で判決が出されたことに、驚きと怒りの声が上がっている。〈住民票続柄裁判交流会〉は1月24日に緊急抗議集会を開き、また最高裁への抗議はがき運動を開始した。

◆連絡先 TEL03・3302・3345 (武田)

## 横須賀市長の「周辺事態法」答弁撤回を求める意見広告

昨年11月25日に沢田秀雄横須賀市長が市議会本会議で「周辺事態法は必要」と発言したことは、『あごろ』247号でもお伝えしたが、この発言に対して全国三〇自治体から「答弁の真意を聞きたい」と問い合わせが殺到した。

神奈川県平和団体・市民団体は、この発言を撤回させるために〈沢田横須賀市長の「周辺事態法は必要」答弁の

撤回を求める意見広告の会〉を結成し、『朝日新聞』湘南版に意見広告を掲載する運動を始めた。掲載は三月下旬を予定している。賛同金は個人一口千円、団体一口三千円。

◆連絡先 TEL/FAX 0468・25・0157  
(非核市民宣言運動・ヨコスカ)

## 衆参両院議員へ「憲法調査会」設置反対の意見書

関東から九州まで二九の市民団体で結成した〈許すな！憲法改悪、市民連絡会(準備会)〉は2月3日、衆参両院議員全員に「私たちは衆参両院に憲法『調査会』の設置をねらう、一部改憲派の人びとの新たな迂回戦術に反対します」と題した意見書を送った。意見書は、改憲を真の目的とする「憲法調査常任委員会」の設置に動いていた議員たちが、世論の反撃の前に「二歩後退」した形で、改めて両院に憲法問題の「調査会」を作るという妥協案を出したことを懸念し、自民・自由党だけでなく野党の合意を得ようとしていることに強く抗議している。

昨年末までに「憲法調査委員会」設立反対の請願署名は約八万人分集まり、二千人の共同声明も出された。連絡会

は、今通常国会に「憲法調査会」設置のための国会法改正案が提出されることのないよう、強く要請している。

◆連絡先 TEL03・3221・4668 (市民ネット)

## 少年法改正案国会提出に法曹界から反対の動き

昨年12月に法制審議会少年法部会で採択された「少年法改正要項骨子」は、今年1月に法制審議会での答申となり、答申に基づく少年法改正案が早ければこの3月にも通常国会に提出されようとしている。答申は広範囲な檢察官関与を認め、また身柄拘束期間も現行の最高四週間から十二週間に引き延ばすなど、現行少年法の保護・育成の理念から厳罰主義への移行が明らかになっている。

〈自由法曹団〉は1月23日に「少年法『改正』案の国会提出に反対する声明」を発表した。また〈日本弁護士連合会〉は改正の問題点をまとめたパンフレット「少年法が面白い―」を作成した。その他、元日弁連会長の阿部三郎さん、中坊公平さんなどが呼びかけて「子どもの視点からの少年法論議を求める緊急請願署名」も始まった。

◆パンフレットと署名用紙は〈あごろ〉にあります。

## 東京都男女平等推進基本条例検討骨子に都民の意見募集

東京都女性問題協議会は、九九年度中に制定予定の「男女平等推進基本条例」の骨子をまとめ、この2月にパンフレット化して都民に公表した。条例に盛り込むべき主な内容は①男女平等参画社会の基本理念……性別に基づく差別のない、男女とも人権が尊重される社会／性別にとらわれず、男女とも多様な生き方が選択できる社会／男女があらゆる分野に平等に参画し、ともに責任を分かち合う社会

②都民、事業者、東京都の責務

③東京都の行う基本的な施策

④具体的な取組……夫から妻への暴力やセクシュアル・ハラスメントなど性別による権利侵害への取組／企業等における男女の平等参画を進めるための取組

⑤都民からの申し出(苦情等の処理)

都は3月15日まで都民に意見を募集中。意見の送り先と骨子の概要は〒163-8001 新宿区西新宿 東京都生活文化局女性青少年部女性計画課 (TEL03・5388・3189 FAX5388・1331)。



## 女性議員ゼロ議会をなくそう

### リレー・フォーラムin新潟

日本では都道府県議会に女性議員がない県が10県ありますが、新潟県もその一つ。市議会での女性議員の比率は4・7%（3市は女性議員ゼロ）、町村では2・4%（31町29村でゼロ）。この状況を何とか改善したいと、〈あごら〉会員の倉元正子さんから超党派の女性32人が実行委員会を結成し、1月17日「女性議員ゼロ議会をなくそうリレー・フォーラムin新潟」が新潟ユニゾンプラザで開催されました。

冒頭、実行委員長の小林真千子さんが「県議選には現在6人の女性が立候補を表明。地方分権が進む中、今回の選挙は新しい時代に向けての最後のチャンス」とあいさつ。

そのあと新潟市出身の猪口孝さんが「地方議会は生活の原点であり、女性の声は絶対に必要。福祉や環境問題など、現場を具体的に知っている女性は強い立場にある」と、ア

メリカや北欧諸国の例をあげながら女性議員の必要性を提言しました。それを受けて、小宮山洋子さんをコーディネーターに、船橋邦子さん・多賀秀敏さん・広岡守穂さんによるパネルディスカッションが行われ、女性議員をめぐる全国を取り組みなどが話し合われました。この動きを全国に広げていこうと、会の結びに女性の議会参画の重要性を訴えた「アピール」が採択されました。

(二)

◆実行委員会では男女共同参画の現状をデータにまとめたミニパンフレット『世界の中の日本・日本の中の新潟』を作成。お問い合わせはTEL025・267・5474倉元正子さんへ。

## 虹と緑の500人リスト関東ブロック結成集会

「地方・地域から政治を変えよう」を合い言葉に昨年十月結成、「地方議員政策情報センター」設立を目指す無党派市民派議員のネットワーク〈虹と緑の500人リスト〉。1月31日（日）午後、関東地方一都六県十山梨県のリスト参加議員と候補者が飯田橋シニアワーク東京に集まり、関東ブロック立ち上げ集会を開催しました。



記念講演は富野暉一郎さん（島根大学教授・元逗子市長）と石川真澄さん（新潟国際情報大学教授・元朝日新聞編集委員）。講演の詳細は本誌24―50ページをお読みください。

会の後半は、まず事務局の小田鈴子さんから全国の状況と経過報告。全国の参加者は1月31日現在254名（女性106名、男性148名）で、現職議員が約60%。関東ブロック参加者は54名だそうです（中野区の佐藤ひろこさん、江東区の田中やす子さん、千葉県白井町の宮沢友子さんは〈あこら〉会員）。そのあとのリスト参加者の紹介で、集会に参加した27名が一言ずつ抱負を述べたあと、全員が前に並んだようすは、なかなか壮観。「私たちが自発的に、主体的に動くことで行政と市民を結びつけよう。そして地域を変えよう」と決意を新たにしました。

◆関東ブロック事務局はTEL0468・73・2487

## 戦後フェミニズムの流れとこれから

〈ウーマン・カレッジ出合いの会〉発足五周年を記念して、去る1月23日、〈あこら〉の斎藤千代さんを雪の上越市（高田・直江津地域）にお迎えして講演会を開催しました。

〈出合いの会〉は、『本音でしなやかに』女性問題にこだわらず、地球環境から政治・経済・平和・いのちの問題にいたるまで、幅広く学びあってきました。

会員は上越地区（二十二市町村）の広範囲に渡っており、当日は上越市外からの参加者も多く「フェミニズムということがよくわからない」という声もあつたので、斎藤千代さんは「私が考えるフェミニズム」という感じで平易な言葉で、ご自身の体験を含めて話してくださいました。

フェミニズムは皮膚感覚で、自分がこのように感じるのはなぜなのか、自分の感覚に敏感であることなど、会場と意見交換しながら差別の構造をわかりやすく納得させてくださいました。

後半は、映画「教えられなかった戦争・沖縄編・伊江島のたたかい」の一部を鑑賞し、関山演習場に隣接しながらも基地問題に関心が薄い私たちの感覚に大きな刺激を与えました。講演の終了は、斎藤千代さんとの素敵な出会いと共に、これからの歩むべき方向をつかみ得た参加者らの満ち足りた思いで溢れました。

なお、この講演会は「田代俊子記念基金」の助成事業として開催いたしました。（新潟県青海町・鈴木勢子）

TERENCE: "Go the distance" (「完投しろ」とね)

RAY: Yes! Do you know what it means? (そうです! その意味がわかりますか?)

TERENCE: Yes. (もちろんだよ)

RAY: What? (どんな意味です?)

TERENCE: It means we're going to Minnesota to find "Moonlight" Graham. (我々がこれからミネソタへ「ムーンライト」グレアムを探しに行く、ということだ)

RAY: We're going…… we? (我々はこれから……我々ですって?)

TERENCE: I must be out of my mind. (どうやらわたしは頭がどうかしてしまっただけだ)

そして二人のさらなる旅 (Go the distance) が始まる。「ムーンライト」グレアムを演じるパート・ランカスターが地味で存在を主張しないのに存在感があって、それでいて役者の名前など浮かんでこないくらい、ストーリーというか画面に溶け込んでいた。

登場人物それぞれが、この世でやり残した課題を最後までやりきる (Go the distance) とある『夢の球場』。それが『フィールド・オブ・ドリームス』だったのだということがだんだんにわかってくる。あの世とこの世、夢と現実が錯綜するのに、流れるようでよみがない。しかもたくさんの重い課題が淡々と語られる。「野球は人生」のアメリカならではのドラマだ。

go the distance を辞書で引くと「最後までやり抜く」「(野球) 完投する」とある。字幕には「やり遂げろ」だった。熟語としての意味がわからないままでもうにももどかしかった謎はやっと氷解した。あれこれ手を出して「やり遂げる」ことのない私には「耳の痛い言葉」だが、おなじことを『英語は映画で』の中で著者の斎藤英次氏が、この映画を取り上げて言っておられた。

ちなみに、教員時代に仲間と始めた文集『とおく』は、遠くと Talk (トーク) を兼ね、「どこまで遠くトークが続くか?」と命名したのだが、今 12 号。go the distance といきたい。

# Go the distance

(ゴー・ザ・ディスタンス)

奥川 睦

『フィールド・オブ・ドリームス』という映画があった。主演はケビン・コスナー。この当時の彼は、脂の乗り切った時代で駄作がなく、監督や共演者を無視してケビン・コスナーの名前だけで劇場へ足を運んでも裏切られることがなかった。『ダンス・ウィズ・ウルブズ』で満ち足りたわけでもなかならうが、あの後ぐらいから少しずつ手抜き？と思うことが増え、『ウォーター・ワールド』のあたりで私の無条件はブツン。私のケビンは『パーフェクト・ワールド』くらいまで、『ザ・ウォー／八月のメモワール』など、まあまあもあるけれど、完全に「良い」と「悪い」の比率が逆転してしまった。と言っても「良い」ものの価値は変わらない。アメリカの良心とも言える映画がこの『フィールド・オブ・ドリームス』なのだ。

アイオワの農夫一家（レイ・アニー夫妻と娘のカレン）に「天の声」が届く。  
“If you make it, he will come”（それを作れば、彼はやってくる）。空耳ではないと確信して主人公は、収穫前のコーン畑をなぎ倒し野球場を作る。「そんな絵空事に肩入れして、借金は返せるの？」と、当然妻は反対するが……。

完成した野球場に、今は亡き名選手たちがやって来て練習を始める。「何」を作れば「誰」がやって来るのか、説明なしで、ドラマは進行し、次に聞こえる「天の声」第二声が表題の語句なのである。

「また声が聞こえたのだ」という夫に、妻は当然困惑し「こんなとてつもないフィールド（野球場）を作ってもまだ目が覚めず、私たちをおいて一人で遠くへ出掛ける（go the distance）というの？」と反対するが、結局は、前回同様、夫の気持ちをくんで送り出す。

レイは、テレンス・マン（筆を折って世間から姿を隠してしまった作家）を苦勞してやっと見つけ出したというのに、まったく取りあってもらえず、けんもほろろの体で追い返されてしまう。その直後、球場のスクリーンに二人だけがこの“Go the distance”を見る。心を開きかけたテレンスとレイの会話。

RAY: Did you hear the voice, too? It's all right to admit it! It's what told me to find you. Did you——did you hear it? (あなたもあの声を聞いたんですか？ 隠さなくてもいいんですよ！ あなたを探すように僕に命じたのがその声なんです。聞いたんですか？)

# 女性記者の使命

坂東千恵子

(徳島新聞社文化部)

この三月末をもって、また、後輩の女性が一人、職場を後にする。結婚が退社理由だが、結婚後も働き続けることは可能な環境だ。どうして? と問い詰めると、記者歴六年の彼女は、あっさりともう、「疲れたわ」と言う。

私は一九八五年、わが社でたった一人の女性記者としてスタートを切った。それから十三年が経ち、女性記者は五倍、つまり、五人に増えた。一年や二年に一回、一人ぐらいの採用があつても、同じペーシングで退社していくので、なかなか増えていかない。最長老としては悲しすぎる現実がある。圧倒的な男性優位の職場で働き続けるということは、ホント、どうしてこんなに疲れるのだろうか。

女性記者は、女性問題を書かなければならない使命を担っている。ずっと、そう感じてきた。少数派であればあるほど、一人ひとりに課せられた使命は重い。地方のメディアはそこで暮らす人びとに大きな影響力を持つている。書き続けることで、男尊女卑の古い価値観が根づくこの地域社会を変える力になる、との自負もある。

ところが、最近、後輩がこんな不満をもらした。「ニュース面に女性問題を書いても、扱いが小さすぎる」。

思い当たる節はある。女性や子育ての問題は家庭面で、という伝統があるのか、ニュース面では「県議会が夫婦別姓に反対の意見書。全国初」というぐらいの迫力のあるトピックスでないと、大きな記事にはなりにくい。こうしたニュースの価値を決めるのは、編集の決定権を持つ管理職であり、わが社ではすべて男性、ほかの多くの新聞を見ても、長い間、男性の価値観で築かれてきた編集方針のルールがかたくなに受け継がれているな、と感じることがある。例えば、行政や企業から発信される記事に重きが置かれ、それに比べると市民発のニュースは二の次という感がぬぐえない。

ただ、恐ろしいのは、男性中心の組織に溶け込んでしまつて、男性の価値観を、知らず知らずのうち

に受け入れてしまっていることを自覚するときがあることだ。

最近、学校の男女混合名簿の問題について取り上げたとき、取材先から予想外の反応がかえってきて、ショックを受けた。徳島県内では昨年四月に、複数校で混合名簿が導入され、学校現場や保護者の関心が一気に高まった。実践校で、熱意ある教師たちの声を拾い集め、男女混合にする意義、子どもたちどんな自覚が芽生えるのか、学校現場で芽生えつつある「ジェンダーフリー」の試みを紹介していった。その記事の最後に掲載した大学教員のコメントが思わぬ反感を招いた。それは「緊急性はそれほどなく、小さな疑問の一つと思うが、子どもや保護者から声が上がれば学校側はきちんと受け止めていくべき」というものだった。何の疑問を抱くことなく掲載したのだが、ジェンダーフリーの教育に取り組むグループの代表から「緊急性があるから私たちはやっているのだ。現場は一刻を争っているのだ」との指摘があった。女性教諭らの試みをサポートするつもりで書いた記事が、かえって足を引っ張るようになってしまった。

「緊急性はそれほどなく」と聞き、自分自身もそう感じたから、このコメントを採用したのだと思う。おかしいと思えば、この部分は削っていたはずだ。なぜ、そのとき、実践校で頑張っている女性教諭の立場に立てなかったのか。彼女たちは、混合名簿を導入してからもなお、「たかが名簿ではないか」という周囲の批判を受け続けているという。自身の想像力の乏しさと人権感覚のなさに苛立った。一体、何のための女性記者であるのか、と。

後輩の退職を聞き、「なぜ、書き続けるのか」と、またしても自問自答することになった。いろいろ思いを巡らせても、やはり、私には駆け出しのころに決意したこの理由がぴたりとくるようだ。「頑張っている女性を紙面で応援する」。トクシマの女性たちの小さな息遣いまでも伝えていけるような紙面づくりをしていきたいと思う。

## 女性審議委員は「壁の花」?

かとうひろこ

私はこの度、市街地活性化に関する市の審議会のひとつに消費者代表という立場で委員として委嘱され、先日第一回委員会に行つてまいりました。そこで感じたこと、そして大変憤慨した事実についてご報告したいと思います。

委員は全部で二十五名。そのうち一般消費者代表は六名（すべて女性）です。ほかに学識経験者に、一名女性が入っていますが、実質男性で占められています。第一回の委員会には多くの報道陣がやってきており、その予算のかけ方は想像に値します。

目的は空洞化の進む中心市街地の活性化を推進するためのものですが、法制上の詳しい説明はここでは省かせていただきます。しかし、市街地活性化を考えるとすることは消費者のニーズを把握するということであり、つまり、実際に購買行動に出ている女性のニーズを掴んでいくことが、基本方針策定の基準であるはずです。しかし、委員会は、女性を（つまり消費者を）まったく蚊帳の外に置いて、進められていきました。

委員会はあらゆる根回しが既に済んでいて、会は進行していきます。何の情報もない女性委員は果た然とするばかり。この御時世、女性を委員に加えないと問題になるし、「消費者の意見も取りいれた」とい

う名目が立つように、女性六名を委員に加えたというだけのことかもしれないという疑念が湧いてきました。そしてそれは、ほとんど図星だと思います。

そして、こういう場では肩書きが人間の価値を計る全であるという事実も目のあたりにしました。「消費者代表」という立場は重要な立場の一つと考えられるのですが、しかしこういう場では取るに足らない立場として扱われるようです。また、個人的には地域研究やまちづくりについて自分の研究領域で少しクロスする部分があるので、委員会に先立って「何かお調べして、資料をご用意していきましょか」と担当者に申し出たところ、「何もしてくださらずに結構です」との回答を受けました。積極的に取り組んだら、何か迷惑であるともいうのでしょか。

委員会で消費者（女性）はお人形さんのように座っていることが望まれているのかもしれませんが。そのような委員会における一般消費者の立場を痛切に感じ、憤慨して帰って参りました。

しかしながら、私は積極的に発言していくつもりです。大変むなししい思いをしていくかも知れませんが、「女は大事なところで発言しない」と、今後女性の社会参画を妨げる口実を作らせたくありません。何の情報も与えられなかったら、自分で調べていき、正論をぶつけていくつもりです。私には他の委員の方々と何の利害関係もないことが最大の強みだと思っています。

これは行政の一端を示した出来事に過ぎないと思いますが、市民が主役の行政など、末端においても実現されていない一例としてご報告させていただきます。今後の情報もまた、お送りしたいと思います。

（編集部注・市の名前は、筆者のお立場上、伏せました）

## 県民へのアピール

### ——軍事基地の県内移設に

#### あくまで反対しよう——

へり基地の新たな候補地として東村高江区や与勝半島沖合が取り沙汰されている中、軍事基地の県内移設に反対する市民団体連絡協議会が2月13日の総会で、県民に向けて基地の県内移設反対アピールを発表した。(浦)

\*

わたしたちは、海上へり基地反対の住民意志を鮮明にした名護市民投票の成果を守り、軍事基地の整理・縮小・撤去をめざす諸勢力の一翼を担ってきました。沖縄をこえる拡がりをもったさまざまな民衆運動によって、現在、海上へり基地建設は、一応頓挫させることができました。しかし、その巻き返しをはかるかのように、「軍民共用」を合いことばに、経済振興策と結びついた基地の県内移設を積極的に容認しようとする動きが表面化してきました。わたしたちは、こうした動きの欺瞞性を明らかにし、軍事基地の整理・縮小・撤去をめざす活動を、いっそう強化していかなければなりません。

第一に、基地の県内移設容認は、戦後沖縄民衆運動史の第三の波ともいうべき一九九五年秋以来の「島ぐるみの民衆運動」の原点を否定するものです。この運動の高揚は、米兵犯罪の被害者である少女とその家族の「二度とこのようなことをくり返させてはならない」という願いに基づく告発に、県民あげて応えようとするものでした。海上基地を陸上に移し、那覇軍港を浦添に移設することによって、あの悲痛な告発に応えることが可能なのでしょうか。

第二に、九五年十月二十一日の県民大会で確認された県民世論の最大公約数ともいうべき「基地の整理・縮小」は、基地撤去にいたるプロセスだったことを忘れてはなりません。基地の数が減り、面積が縮小されれば、基地機能が強化されても、沖縄県民は基地と共存するという意思表示ではなかったはずです。

第三に、「軍民共用」の非現実性は、普天間基地の嘉手納統合が、米軍部の強い反対に直面したこと一つをとっても明らかです。空軍と海兵隊の共用も不可能なのに、どうして軍と民の共用が可能なのでしょう。那覇軍港の浦添移設にしても、米軍が付けたさまざまな港湾機能



## 沖縄から

の強化という条件に、当初は、防衛庁すら代償が高すぎると不満を示していたと報道されていたのです。佐世保、横須賀並の港湾施設の強化は、基地の本土移設どころか、在日米軍基地の沖縄への集約化をいっそう促進することになるでしょう。

第四に、そしてとりわけ重要なことは、沖縄基地が何のために存在するかという、より本質的な問題です。過去半世紀、沖縄基地は、日本の防衛（安全保障）のために、ましてや沖縄自身の防衛のために使われたことは、一度もありません。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争と、一貫して、直接的攻撃基地として、あるいは、攻撃のための後方基地として、アメリカの軍事的世界支配のために使われ、罪なき多くの人びとを殺りくする拠点とされてきたのです。このような基地の機能強化を住民自身が認めることは、自ら加害者の立場に立つことを承認するばかりでなく、沖縄基地が攻撃対象とする日米の仮想敵国の攻撃目標となることをも認めることにほかなりません。一時的な土木工事費やいわゆる経済振興策と抱き合わせた基地機能の強化を認めることは、道義的に許されないばかりでなく、沖縄自身を軍事的攻撃の危険に

さらすことでもあるのです。

わたしたちは、基地の整理・縮小・撤去こそが理念的に正しいのみならず、現実的にも、沖縄の将来に平和を保障する唯一の道であると確信しています。わたしたちは、このような確信をもって、今日ここに集まり、近隣アジア諸国・諸地域の、さらには全世界の民衆との平和的共生の道へ向かって、あらためて力強く歩み出すことを決意し、県民のみなさんが、基地のない世界をめざして、わたしたちと共に歩まれんことを心から訴えるものです。

### 〈基地はいらない御万人ネット〉がスタート

一昨年11月、名護市市民投票前に「へり基地NOー」の新聞意見広告を出そうと結成され、全国からの協力で広告掲載を実現させた「へり基地NOー女性たちの会」は、今年1月23日に発展解消ということで幕を閉じ、新たに「基地はいらない御万人（うまんちゅ）ネット」がスタートした。代表の高江州あやのさんが「基地のない平和で豊かな未来を二十一世紀へと引き継ぐために、こ

の小さな渦を大きなうねりへと、しっかり地に足をつけて  
確実に前を見て動きはじめたところだ」と、趣旨を説  
明している(御万人とは「大衆」「普通の人びと」の意味)。

また「へり基地NO! 女性たちの会」でつくった「ひ  
やみかち工房」は、これまでのジュゴンバッジ、Tシャ  
ツなどに加え、やんばる(沖縄本島北部)の物産を取り  
扱ったり、エコツアー紹介などにも取り組む予定。

◆TEL&FAX 098・947・1237  
(うまんちゅネット・ひやみかち工房共通)

## 改定特措法は違憲! 第一回口頭弁論

97年4月に改定された米軍用地特別措置法は「憲法の  
定める財産権や適性手続き保障に違反するので、違憲で  
あり無効である」として、有銘政夫さんや島袋善祐さん  
ら反戦地主七人が国を相手取って訴訟を起こし、その第  
一回口頭弁論が、2月2日に那覇地裁(原敏雄裁判長)  
で開かれた。

訴状によれば、「旧特措法」に基づいて県収用委員会が  
裁決した嘉手納飛行場などの強制使用期間が97年5月に

使用期限切れになるのを前に、国は不法占領状態を避け  
るために、収用委の審理中および収用委が強制使用を却  
下した場合でも、起業者である防衛施設局長による建設  
大臣への不服審査請求中は、暫定使用ができるという内  
容に特措法を「改定」した。これによって収用委の裁決  
や地主への事前告知を経なくても土地の強制使用が可能  
となり、これが「憲法の定める財産権や適性手続き保障  
に違反する」と原告は主張している。国側は原告の主張  
に対して「全面的に争う」と反論、請求の棄却を求めた。

## 石川真生さんの写真展を開催しませんか

沖縄の人びとを一貫して撮り続けている女性フォト  
ジャーナリストの石川真生さん。へり基地建設問題が起  
こってからは名護に住み込み、写真と文章による貴重な  
記録『海上へり基地——拒否と誘致に揺れる町』(高文研  
刊)を出版した。この中から写真百点をパネルにし、全  
国各地で巡回写真展を開催中。写真展開催を希望する  
方・グループには、写真を有料で貸し出します。FAX  
098・856・5087(石川さん)へご連絡を。

### 今も昨日のように——阪神からの報告

震災から丸四年、神戸から離れて住んでいる私にはわからない事が多くなったので、長田区に住んでいる友人にお願いしたら「今も昨日のように」と題された文章を送ってくれました。

\*

一月十七日、旅先で地震ニュースを知りました。一人息子を神戸に残してきたことが気掛かりで頭の中は「どうしよう」「なんで」「どうしたんやろ」と恐怖と不安で私は武者震い。この時ばかりはこれまでにない大願いの気持ちにひたりました。

そんな時、携帯電話から「家族、親類が無事である」と、この耳でしっかり聞きました。私は心の中で空を見上げながら叫びました。「ありがとう……」と。

午後便で大阪空港に着くと想像以上に悲惨な状況、日本が誇る高速道路倒壊、自然の瞬発力、直下型地震の痕跡は多くの命を小刻みに「うばっていく」。ロビーのテレビを誰もが祈る思いで見ているにちがいありません。速

足でいつもの空港バス停に行く運休、電車も不通。夕方になっても帰る手段もなく、寒々としたロビーには毛布の配給もなし。夜九時を過ぎても人は増えるばかりで、何百人もの人が足止め状態となりました。何時間もかけて歩いてきた話を聞き、希望を持ちましたが、六十を過ぎた母も一緒だったので断念しました。

早く帰りたい！ 次にタクシーを待つことにしました。近くから来る数台のタクシーに「神戸まで」とおねがいすると、「あかん、行かれへん、むりや、むりや」とあしらわれました。

母と相談して朝方まで待つことにしました。母は母なりに心配している。家族のこと、火災のことなど。私は勇気を出して「全焼」報告をしました。やつれきった母の体が小さく震えながら、悲しみと覚悟の意を表しました。「皆が無事であることが一番や」と、そして涙一つ。

早く神戸へ帰りたい。

まだ薄暗い朝五時、一台のタクシーに声をかけ、お願いしました。運転手は「行つたろう。そやけど何時間かかるかわかれへんで」。

これは奇跡に近い。一晚中隣同士だった男子学生さん

は神戸北区だったの、私たちと一緒に来ることになりました。タクシーに乗ると運転手が飲むはずだったコーヒー缶を「暖かいうちにどうぞ」と母に手渡し、「トイレは大丈夫か」「家族の安否は取れているか」「携帯電話あるで」と、おだやかに声をかけてくださいました。人間のすばらしい出会いを感じました。この場をお借りして、もう一度お礼を申し上げたいです。

午後になってようやく、子ども、家族と再会。一瞬にして真実と絆と愛を確信しました。そして、父は話しました。

長年住み慣れた街が次々に延焼し、それが自分の家の台所に迫ってきたときに、手をあわせて「ありがとう」と言ったそうです。今まで見たこともない父の重苦しい表情に、私は励ます言葉を失いました。だけど、どんな荒波でも平気で乗り切った父だから大丈夫だと、私は自分に暗示をかけました。やはりそのとおりの父で、半年後には再建できました。

亡くした物は多く、そして返らず  
お金じゃない人と人とのふれあい  
助け合う心

ど根性

生かされている命

明日も生きる力

一月十七日を経験して、初めて我が身のこととして受けとめる恥ずかしい私。

\*

この文に触れて、私にとつての震災も昨日のように鮮明になりました。読んでいるうちに涙が止まりません。五年目になる震災の記憶は一月十七日の前後にしか話題になることがない今日この頃、神戸の人は新聞等の投稿、意見として忘れてほしくないと思っています。

(兵庫県佐用郡南光町 濱名育代)

## 支援金電話相談千七百件にのぼる

昨年五月に成立した「被災者生活再建支援法」の附帯決議に基づく「被災者自立支援金」の支給が、昨年十一月から兵庫県で開始されたが、すべての被災者を対象にしているわけではないことから、法の問題点が明らかになってきた。

〈公的援助法実現ネットワーク〉は被災者に対する電話相談を実施し、昨年末までに千七百件もの相談があった。家が半壊しても解体せずに補修したため支給対象外になった世帯や、世帯合併のために年収オーバーになった例など、法とその適用のさまざまな矛盾が浮き彫りになり、この問題点は今年一月十七日の朝日新聞関西版の一面トップで報道された(全国版には掲載されず)。同ネットワークでは、対象外とされた世帯を救済するため、伊賀興一弁護士を中心に行政訴訟の準備を進めている。

◆連絡先はTEL078・577・8890

## 「生活基盤回復援護法」制定を！

前号でもお伝えしたように「国による自然災害被災者の生活基盤回復等を促進するための公的援護措置置法案(略称・生活基盤回復援護法案)」が〈市民Ⅱ議員推進本部〉などによって提案された。その骨子は、自然災害の被災世帯に対して、全壊世帯最高五百万円、半壊二百五十万円、一部損壊百五十万円の援護資金を支給し、また住宅再建・補修のための貸付を最高二千万円とする、と

いう内容。さらに援護金支給の実施機関として、自然災害被災者援護庁の設置を提案している。なお、附則で阪神・淡路大震災被災者にも遡及するよう求めている。

〈市民Ⅱ議員推進本部〉と〈公的援助法実現ネットワーク〉は一月十七日に神戸三宮で街頭リレートークを行い、神戸の人びとに法案の実現を訴えた。三十一日にも神戸で法案説明会を開き、推進本部代表の小田実さんや伊賀興一弁護士が法案について説明した。

◆連絡先はTEL0797・38・2585

(本部事務局)

## 資料整理ボランティア募集

〈震災・まちのアーカイブ〉では、震災の資料を残すことで記録を後世に伝え、震災を体験した人びとが自らの記録を保存していくためのお手伝いをするボランティアを募集中。

活動日は第一・第三木曜日と第二・第四土曜日の十時から十七時まで。

◆連絡先はTEL078・781・8891(季村)。



# 新工業国と呼ばれてゆくニューニートの女性たちII

サンディ・サカモト

強制立ち退きと共同体——元農園がゴルフ場に

農園所有者は一般に労働者の住居、ときには学校まで提供する時もある。しかし、最近の開発で、そこも立ち退きになることが多い。その場合、仕事以外の金銭的補償はいっさいないため、労働者は仕事、住居、子どもの学校のすべてをなくしてしまい、とても厳しい状況に追いやられる。

ある日、ゴルフ場建設のため強制立ち退きに直面している元農園労働者の住民を支援する団体、〈共同体開発センター(CDC)〉が支援している地域バアエマという元農園地域を訪ねた。この地域では、強制立ち退き反対運動続行中であるという。この地域の住民のほとんどがすでに移転してしまったのに、たった一つの地域の人々が補償闘争を繰り広げ、今までの土地に見合った家と経済的補償を要求していた。そればかりでなく、この住民は、この地域を「解放区」と呼び、パトロールしながら、不審者を入れないようにしたりして自分たちの身の安全を確保している。また、近くにできたゴルフ場の一部の土地を取り戻そうとして、その住民の子どもたちがその場所でサッカーを定期的にしはじめ、開発者(ディベロッパー)と喧嘩になったが、最終的にはその土地の一部を返してもらえたという。その共同体は自分たちで規則をつくり、独立したものになっているのだ。

この共同体の背景と言えば、大学生が農園の人々の状況を知ろうとしたのがきっかけとなり、もつと農園について知らなくてはならないということで共同体の人びとの教育と組織化と労働問題を学ぶためにCDCを創立した。十年前に創立者の学生は大学を卒業したが、その後、後輩の大学生に引き継がれて、まだ学生組織は活動しているという。学生は二十の農園を訪ね、ミーティングを重ね、多くの住民が立ち退きを迫られていることを知り、現在、それに見合った家や補償の要求を支援する運動をしている。

ゴム農園バアエマ地域で、元農園労働者とその子どもたちを組織し、立ち退き反対運動を進めるのに成功したのは、その子どもたちが大学生と一緒に運動を進めていったからだ。驚いたことは、その地域のゴルフ場開発のために働いていたインドネシア労働者に、彼らはなぜゴルフ場建設に反対であるかを説明したら、インドネシア労働者は「僕が君の立場だったら、同じことをしているだろう」と言うて理解してくれた。この背景には、インドネシアでも同じように住民を犠牲にする開発が行われているという現状がある。このように自分たちの地域のゴルフ場建設反対運動が工場労働者の組織化や移民労働者の意識改革にまで繋がられている。このような広範囲にわたる息の長い運動をしていることに私は感動した。CDCのリーダーの一人がいつも言っていることは「開発者のもで働く移民労働者は敵ではない」ということだという。このような哲学が根本にあるからこそ、移民労働者の理解を得ることができたのだろう。

さらに驚いたことには、この組織がメディアを通して問題を公にしたり、訴訟を起こしたりしたため、はじめは開発側の立場をとっていた地元の警察の態度も変わり、中立になったり、時には、反対側の立場さえとるようになったという。彼らがこのように根強く反対できる理由の一つとして、土地が法律的には開発者のものになっているとはいえず、元農園労働者の住民はそこに長期間住んでいるという事実が

あると思う。

強制立ち退きの時は、女性が前線に立つて闘うことが多い。それは女性を簡単には傷つけないだろうという予測があるからだという。

政府は補償をせずに住民を立ち退かせようとする。あるケースでは、住民が訴訟して勝利し、五万二千リンゲ（約百八十二万円）を受け取った。住宅問題が増えている理由の一つとして、政府が開発者に低所得者用住宅建設を任せてしまうというのがある。開発者は勝手にもっとお金のある人々用の住宅を建てたり、たとえもし、低所得者用の住宅を建てても、決まった値段で売らず、上乗せして売するため、本来の低所得者は買えず、結局、もっと経済的に豊かな人びとの手にわたってしまうことが多い。中には一大家族で家を二つも三つも持っている人もいる。

一年前にCDCは、その農園の子どもたちが働く工場の労働者たちを組織し始めた。それは、彼らの運動をより強固なものにするためであった。その農園の子どもたちが現在工場労働者として働く若者を組織し始めたのだ。この団体は女性と男性混合なので、主なリーダー格の人は男性が多いようであったが、その中の一人のインド系女性は、リーダーの一人らしく、ミーティングのはじめにいつもみんなに説明をしていた。その女性がしきりに、私に日本ではどんなことをしているのかを興味深く聞いた。この日あったミーティングでは、それぞれの工場現場のことを話し合った。内容は次のようなものであった。女性Mはサイン・テクと呼ばれる現地の中国系の会社で働いている。以前はポーナスを千リンゲ（約三万五千円）もらっていたが、ある女性労働者はそこでもう四年も働いているのにポーナスをもらえなかったという。それは、産休をとったからだという。ほかの労働者は二年しか働いていないのにポーナスを受け取った。



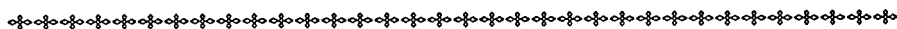
女性労働者Nは、ガッピイ・プラスティックという日本の会社で働いており、五百人の工場労働者がそこで働いている。三交代制で、工場は二十四時間操業している。労働者は給料値上げなどの権利を要求するために組織化を進めている。CDCが組織している会社の中には平和技術やタカタなど日本の会社も含まれていた。

聞いた話の中で、びっくりしたのは、日の丸という会社がバングラデシュ人を雇っていたが、何も知らせずに会社を閉鎖し、彼らのパスポートを返さなかったため、労働者は外に出られず、工場の中に一か月もいたという事件だ。マレーシアの法律では、外を歩くときは労働許可書をもたなくてはならないと決まっているが、その許可書もなかった。それで、食べ物だけはこっそり買いにいったが、あとは工場にいるしかなかったという。しかし、ついに逮捕され、現在はほとんどが国に帰って残っている人もわずかだが、まだ六人は六か月以上も収容所にいるという。日本の会社が海外でいかに労働者の人権を無視しているかを見たような気がした。

私がCDCのメンバーにどのように組織してきたか聞くと、ミーティングや学習会を行い、労働者に直接関係のある問題を話し合ったりして、グループを続け、より多くの人から支援されるようにどんなことがあっても続けることだという。女性運動についても当てはまるが多く、身につまされる話だと思った。

## 共同体組織パルマス

私は、パルマスのリーダーの一人、レニーという女性に会ってびっくりした。それは彼女が五十代の女性でありながら、疲れなどみせず、エネルギーに活動していたからだ。私は彼女を見たとき思わ



ず安心した。それは、今まで女性と会いたいと言っても、男性を紹介されることが多かったのと、せっかく女性と会えても男性が通訳者になり十分に話ができなかったり、男性が勝手に話したりなど、いろいろ困ったことがあったからだ。彼女は私を臨時仮設住宅に連れていくなり、十人のインド系の女性たちに職業を聞いた。彼女たちは、強制立ち退きのため仮設に移ったが、その後その土地に見合った土地がもらえると約束されていたのにもかかわらず、五年たつても政府は何もしてくれていないという。女性たちの給料は五百リングゲたらずで生活は苦しいが、住宅費が無料なので、どうにか暮らしているらしい。そこで作ってくれたジュースは粉の色つきのオレンジジュースだった。その中に虫が入っていた。冷蔵庫もあったが、衛生面で生活レベルが低いことを感じた。例えばトイレは、コンクリートの上で作った簡単なもので、駅のトイレのようなのに裸足で用を足さなくてはならない。もちろんその周りを流す水はあるが足が汚れてしまう。しかし、部屋の面積は日本のアパートなどよりずっと広くうらやましくなった。リビングは十畳以上あった。女性たちは意外にもオープンで、日本の女性の話にとっても興味をもったらしい。その家の女性は夫が失踪したと聞いたが、子どもの一人はてんかんで苦しんでいた。私が訪問したときも息子が目の前でてんかんで倒れた。話してくれた女性たちの仕事内容は次のようであった。

A 家のドア作り専門の中国系の家具工場で働いている。彼女の労働時間は月曜から土曜の八時から五時までだ。彼女の給料は一日二十リングゲ（七百円）だが、特別手当を入れると約五百七十リングゲが一个月的給料になる。以前は残業があったが、最近はほとんどない。この仕事には手を切ったりなど危険が伴う。男性の給料のほうが高いという。

B メモリーと呼ばれるチョコレート工場で働いている。二つのシフトに分かれていて、八時から四時

四時から十一時になっている。百人の労働者が働いているが、ほとんどがインド系女性である。残業の時は七時まで働くが、残業はあまりない。男性が製造部門を受け持ち、女性がパッキングを受け持っている。その女性が言うには、給料は仕事と技術によって違うので男性、女性には関係ないという。しかし、私は分業の仕方で男女を分けているような気がした。

C バンドーと呼ばれる日本の工場で、テレビのトランスフォーマーを作っているという。彼女はそこで二年間働いており、二交代制で七時十五分から五時五十分までか夜六時から夜中の二時まで働く。二百人の女性労働者と七十人の男性労働者がいる。彼女の給与は四百七十リングで、休まなければ五十リング余計にもらえるという。男性労働者は東部マレーシアのサバやサラワクから来た人たちだ。もし、病院からの証明がなく病気で休むと一日の給与と五十リングを一月の給与から減らされる。一年に十二日間の有給休暇がある。つまり、一か月一日の有給休暇があることになる。今、彼女にとって一番問題なのは、工場で一日中同じポジションで仕事をするので、背中や肩が痛むということである。性にかわりなく同じ仕事をしていれば同じ給与をもらえるという。しかし、性に関係なく職種を選べるかどうか問題だ。

D カントリー・クラブで、花の世話をしている。花を植えたり、草を刈ったりする。一か月に四百四十リングの給与をもらっている。普通、六時四十五分から二時四十五分まで働くが残業はほとんどない。もしあれば、六時まで働く。問題は太陽が照りつける暑い時間に仕事をするのと、化学肥料や農薬をまくので危険だということだ。労働者の多くは会社が手袋を用意しても使わないという。男女とも同じ仕事なので給与は同じだという。

E メリー・シェフと呼ばれる地元のチリ・ソース会社で五年間働いている。最初は一か月三百リング

しかもらっていなかったが、現在は五百六十リングもらっているという。一人のインドネシア人労働者が働いているが、その他は現地のインド系女性とバングラデシュ人男性が働いている。初任給は一月四百リングで、月曜から金曜まで八時三十分から五時三十分まで働く。土曜日は半日である。残業する女性労働者が多いが、それは給与が最高でも五百七十リング（一九、九五〇円位）にしかならず、物価に追いつかない低い給与のため残業をするしかないのだという。

女性たちの労働状況は労働量や賃金から見てかなり厳しいものであるように思えたが、男女の賃金格差など男女差別という面では日本よりましという印象をもった。それは、男性と給料が同じという女性も少なからずいたことと、女性労働者たちが、同一労働をしていれば同一賃金だという考えをもっていたからだ。しかし、女性と男性が必ずしも同一労働をしていたわけではなく、会社に入る時点で仕事の内容が違うために賃金が違うということもあるように思われた。

この女性労働者たちは、臨時仮設住宅に住みながら、生活を維持するために働いている。低賃金のため生活は楽ではない。九〇年以降、大がかりな開発が進められたために、彼女たちも立ち退きを迫られるこのような仮設住宅に移ったのだ。開発のための立ち退きと言われているが、その開発はいびつな形のもので、多くは欧米、日本のODA、外国投資家、企業がからんでおり、開発そのものがマレーシアの利益にならない場合も多い。このように考えると、強制立ち退きはけっしてマレーシアの国内問題ではなく、あきらかな国際問題なのである。

## 女たちが強い農園——グレンゴオリー・ゴム農園

農園労働者の大部分が女性で女性が強いと言われている地域を訪ねた。家族全員が、その女性の労働

農園で働く女性たち



に頼っているため、夫の態度は私の予想とはずいぶん違っていた。女性たちが、私と男性を批判するような話をして笑っているだけで、夫は傍観者であった。そのような女性の強さに感動した。彼女たちの毎日のスケジュールは次のようなものである。

毎朝四時に起きて子どもが学校にいけるように準備する。朝六時三十分には農園で働き始める。十時三十分にはいったん仕事を止め、十二時まで休憩する。十二時からまた二時三十分か三時三十分までゴムをタンクに入れる。平均一日十五から十八リンゲ（約五百三十五円から六百三十円）の給与が支払われる。彼女たちは月曜から土曜までこのように働くが、もし雨が降ったりしたら、仕事はなく、補償もないという。給与の値上がりはほとんどない。数年前に給与の値上がりは二十か三十セントあったきりだという。十年前は一日の給与は九・四〇リンゲだった。現在は十二・二〇で多少上がったが、物価の値上がりと比べるとときわめて少ない額だそうである。彼女たちの夫は仕事を持っているが、寡婦も多い。女性たちは、農園の仕事だけでは暮らせず、農園の仕事が終わって、また町で働く者も多い。女性たちのほとんどは十七年から二十年間働いている。家父長的な他の農園に住む女性たちとは違い、ここでは、夫の稼ぎを管理する女性もいる。その中の一人が言った。「夫はお金をうまく使えない。毎日必要なものにお金を計画的に使えない」。女性たちはインド系の夫をもつが、夫がお金をコントロールできないかと思っているようだ。私が彼女たちに夫に家事をしてほしくない

ですかと聞くと、女性たちが「私たちでできるから、結構」と、まるで夫は何もできやしないとも言  
うように笑っていた。女性たちはすべての家事をするが、夫が子どもの世話をすることもある。彼女た  
ちが一番困っていることは、経済的な問題だという。給与が低すぎるのだ。次に問題なのは子どもの教  
育だ。十三歳位までに、子どもは試験に落ちてしまい、学校を続けられなくなるといふ。四十代の女性  
たちは、みんなお見合いで、結婚するまで相手の顔も見ることがなかったという。女性たちは十五歳か  
ら二十二歳までに結婚した。当時、夫のほうは二十四歳から二十九歳であったという。

現在はそうではなく、たとえ親が決めた結婚でも、結婚前に相手とつき合えるし、恋愛結婚もあると  
いうが、親の許可を得なければならぬ。この地域では離婚はないが、夫が失踪したケースはある。平  
均五人の子どもがいる。リーダー格の女性が言った。「私と夫はいつも喧嘩するけど、最後に勝つのは私  
よ」。もし、妻が夫に殴られたりした場合は、近所の人たちが夫に「暴力をふるわないように忠告する」  
という。女性たちは毎日農園で力仕事をして家計をまかなっているうえに、家族全員が彼女の働きで得  
た家に住んでいるので、女性たちは精神、肉体ともに強く見えた。家は無料だが、電気と水道代は払う  
という。私が女性たちと話している間、夫は傍観者として見たり、聞いたりするだけで、ときどきニコ  
リと笑うがけっしていやな顔をしたり、怒ったりしない。私は、そんなマツチヨでない男性がいるのか  
と驚いてしまった。

## まとめ

マレーシアには広大な森林地帯があるため、人びとは比較的広々としたスペースに住んでいる。スク  
ワター地域は全体的にフィリピンのそれよりも状況はよい。しかし、数多くの人びとが自分たちで電気

水道、電話をつけるなどして社会制度とまったく関係のない所に住んでいる。初期には、政府が森林開拓を奨励して人びとを森林地帯につれてきたのに、その後何の世話もせず、今は欧米日本から押し寄せてきた開発という名のもとに人びとを追いつ出しにかかっている。元の土地にみあった場所を提供すると約束しておきながら、放っておかれたケースも少なくない。

イスラム教という宗教の重圧のため、家庭の中でマレー系女性の本心を聞くのは難しかったが、若い女性たちを見ているとそれも変わってきているのがわかる。また、その中でも専業主婦であるのと外で労働者として働いているのでは女性の態度が違うようだ。外で働いているマレー女性は比較的積極的だ。

マレーシアの女性労働者の状況はけっして良いとは言えない。非常に低い賃金で、残業を自らしなければ生活していけないようなしくみの中に置かれている。また、輸出加工区の女性労働者は、技術をまったく学べない状況の中で終わりのない労働をするよう仕向けられている。彼女たちは多国籍企業に組み込まれた安い機械のような存在になっている。正社員として働けるところが、短期間の契約労働者としてしか働けないフィリピンに比べてよいと言えるかもしれないが、経済が悪化しているアジアにおいては、それも時間の問題かもしれない。工場労働者たちも家父長制度に支配されながらも、工場で労働者として目を輝かせながら働いていた。輸出加工区には、女性労働者が多く、低賃金で働いていた。職種が違う場合、少数の男性が大多数の女性よりも技術的な仕事をしていて給料が高い場合もあったが、同じ仕事の場合は男女とも同一賃金である所が多く、日本よりも女性と男性の格差が小さいようであった。女性たちが一歩ずつ女性が団結することを学び、自分たちを解放しようとしている姿に私はとても感銘をうけた。外から来た私と話すとき、タミール語から英語に翻訳してもらって話したときは恥ずかしそ

うに恐る恐る質問に答えていたインド系女性が、インド系女性の前で自分の言葉であるマレー語やタミール語を話したとたん別人のようになった。彼女の目は輝き、仲間の女性たちと呼びかけている姿は自信にあふれ、明るい未来を見つめているように見えた。インドの女性たちは封建的な伝統の中で自由を奪われているのにもかかわらず、社会の底辺で明るく生きていた。

他の近隣のアジア諸国から来て働いている移民女性労働者たちは、さらに悪い条件で働かされている。その悪条件に加えて、精神的、肉体的、性的虐待を受けている女性が多い。たとえ不当な労働を押しつけられても、たとえセクハラされ、レイプされても、証拠不十分などと言われ、犯罪者である雇用主は罪を逃れることが多い。彼女たちの尊厳はまったくといっていいほど守られていない。

農園で働く女性たちの状況は厳しいようだ。住居が提供されているとはいえ、極低賃金で朝早くから重労働をし、家事、育児もすべてこなす女性たちに男性が頭があらぬのも当然かもしれない。とはいえ、私が訪ねたのは女性が強い農園だったので他の農園とは違うだろう。他の農園ではそれでも男性がいばつていて、女性は家庭と社会の奴隷になっているのかもしれない。農園女性労働者は家事も育児も仕事もすべて請負いながら、なおかつ夫の暴力と闘っている。しかし、彼女たちには家族の責任を負い、社会で労働をしているという自負があるため、地に足をつけて力強く立っているのだ。農園は必ずしも現地人の所有ではなく、欧米人所有のものもある。ここからも、農園の女性労働者の極低賃金のために、欧米が潤っているという状況が見えた。

仮設住居で共同体をつくる女性たちの団結力には目をみはるものがある。家庭をもち工場労働者やティラーとして働く女性たちが、助け合って生きている。そこには隣組の助け合いとはひと味違った絆がある。それは女性としての尊厳を持ち、それを魂の底から支持する女性の力強さだ。仮設住宅に住



む女性たちも互いに助け合い、お互いに自立しながらよりよい生活を求めて闘っていた。

スクワター、工場女性労働者、農園女性労働者、仮設住宅に住む女性たちすべてに言えることは、彼女たちの目が輝いているということだ。落胆した女性はいなかった。厳しい生活の中でも、喜び、希望を見いだし働き生きている。不思議なことは、人種的にいつて一番生活の苦しいインド人女性とは話すことが比較的楽にできたのに、マレー人女性に近づくとともに難しかったことだ。それは宗教的な面があるのかもしれない。しかし、恵まれていないスクワターのマレー系女性たちは私にその地域を説明しながら歩き回ってくれた。その地域を歩き回っていたとき、でこぼこの道や簡単な橋を渡るのになれているその女性がニコニコしながら私の手を引いて助けてくれた。それが何よりうれしかった。男性がいつも邪魔したり、仲介役の女性がいなかったためになかなか近づけなかったからだ。

多くの女性活動家は、女性が直面するさまざまな問題はけっして、女性問題としてだけでは解決できないことを知っているようであった。日本や欧米諸国が押し進める開発によって家や土地を失いそうになつていたり、多国籍企業の工場の低賃金で厳しい生活を強いられている女性たちがいるからだ。単に家父長制度と闘つても問題の解決にはならない。かといつてそれを無視することも不可能だ。彼女たちは、その両方から女性解放のために社会にメスをいれているのだ。

全体的に見て、確かにマレーシアの女性の生活状況のほうがフィリピンの女性たちよりもよく見える。しかし、彼女たちの労働条件を見ているとけっしてそうばかりは言えなくなってくる。マレーシアの恵まれた環境や人口数などの関係で今まで潤っていたとは言えるかもしれないが、マレーシア経済の面から見ると、日本、欧米諸国の支配的構造がますます表面化してきている。そしてそこからくる開発、グローバルライゼーションの影響は、もろに女性たちの生活に影響している。だからこそ毎年行われている

APPEC会議（アジア太平洋経済協力）はアジア民衆にとっては、欧米、日本優先の経済会議としてしか見えず、そのたびに多くの第三世界の民衆が抗議の声を大にしているのだ。今年マレーシアで開かれたこのAPPEC会議中、マレーシアの道路は、抗議の若者でいっぱいになったという。今、アジア経済そのものが破壊されようとしている。しかしながら、欧米、日本はさらに自分たちの国の利益になるグロバライゼーションを進めようとしている。それは、女性たちの生活をさらに破壊することを意味する。

マレーシアの民衆、女性たちがもつと人間としての権利が保証された生き方をするということは、マレーシア政府が大国に無理強いされることなく人びとの利益になるような政策をとることであるはずだ。現在のようにIMFや国際銀行に多額の借金をするようなことなく、政府が独立することが求められると思う。私が見たり聞いたりした限りでは、民衆、女性にとつて必要なのは、政府に強制立ち退きなどされることなく、自分たちの土地、住居を確保できること、そして女性たちが工場などでも残業などせずに働いて生活できること、また農園で働く女性たちが何年働いても給料はほとんど上がらず、ただ長時間働き、家事、育児も全面的に面倒みるなどということなく、生活がもつと保証され、男性も家事、育児に協力することが求められると思う。このような生活の基盤を求める闘いの中で、さまざまな分野から多くの女性たちが自由と解放を勝ちとり、一步一步進んでいるのを私は見た。その姿は、私たち日本の女性への警告と励ましのように思われた。

それは外国に政治的にも経済的にも支配されたり、支配したりすることなく、女性と男性がただ生活の奴隷になるのではなく、人間として扱われ、それぞれの人間性を豊かにして生きていけることではないかと思う。

## あこら読書室

### 妻の決心・夫の腐心

横田賢一著

日本図書刊行会刊

「あれは革命だったのだ。今から思えばのことであるが、そう切々と感じられる」——市議になった女性の夫の、切実で率直な記録である。

ある日、突然妻が議場を目ざした。その日から「夫の腐心」が始まる。フツの主婦に雑事をまかせて、ああだこうだと文句を並べ立てながら、優越的に振舞って、仕事人間をこなしていた、と気がつくのは、その妻が当選して二幕目に入ってからだったと、夫は回想する。

「私を市議の候補にと言ってきた

わ」。ある朝、妻はぼつりと独り言みたいな感じで言った。「ふうん」と生平可な返事をした。結婚二十年目、妻四十二歳、夫四十三歳。倦怠期の適齢期だった。

半月後、妻は一通の通知書を手にした。〈時代をきりひろく平和憲法の会、おかやま〉によって候補者の選定が進み、有力な候補になっていた。

夫は新聞記者。自称「思慮深くない」。好奇心がいつばい。女性に理解があると思いつ込んでいた。資金のメドさえあれば、拒否する理由はない、と思っていた。資金は市民がカンパした。

そして妻は当選した。そこからが第二幕。夫は夕食をととのえて遅い妻の帰りを待つ。郵便物の数は逆転した。電話は九割以上が妻。一人と会話中にキャッチ

ホーンが複数入って慌ただいしこと限りなし。——すべて大逆転だ。

妻、横田悦子さん。岡山の〈あこら〉会員。この春は女性を二人立てて、さらに大きな戦いをいどむ。いよいよ第三幕……普通なら「悲壮」になる物語が、さすが新聞記者、軽快に、おもしろおかしく書かれていて、二二五ページをひと息に読んでしまった。ウーン、こんな夫を持ちたいもの。議員を志す方、推す方、その周辺の方、必読の書ですゾ。(千)(A5判二二五ページ本体一五〇〇円)

### 地方から政治を変える

地方議員政策研究会編

コモンズ刊

二十一世紀を目前にして、日本社会は政治・経済・社会のすべてにおいて行き詰まってしまった。

国政の場では離合集散が繰り返され、

福祉・教育・環境などの分野での、政治の貧困が目立っている今日、本書は地方から政治を変えようという連携呼びかけの書である。

本書の「はじめに」に、「八九年の衆議院選挙の土井・社会党、九三年の衆議院選挙の細川・日本新党、九五年の東京・大阪両知事選挙、九七年の宮城県知事選挙に続いて、無党派の「風」が五たび吹いたのである。まさに風が吹くたび、政党は振り回され、政治の常識がつくりかえられてきた。風に一回のつたと思っても、次には地面にたたきつけられる。政治不信はとどめもなく進み、新しい政治スタイルは求め続けられている」と記している。

この十年間のさまざまな風の中から、地方政治の場におどり出た人たちの活動と実現してきた具体的政策の紹介書であ

り、そんなにおもしろいなら自分も地方議員をめざしてみようかという人のための入門書でもある。

また、この春の統一地方選挙に向けた〈虹と緑の500人リスト〉の理念と目的にもふれ、地方からの挑戦の息吹と新しい風を感じる。

(鈴木 勢子)

(四六判)三九ページ本体一七〇〇円

## 女ひとり地方議会に春一番

### ―新入り議員の涙と笑―

小川みさ子著

BOCC出版部刊

「この本を読むと、『女性は大太陽』であることが実感できます。環境・福祉・教育・自治……。ほんものの議員がほんものの自治に取り組むと、たとえささやかでも、こんなに明るい光が射すのです。」

仮綴じを読まれた石川真澄さん(朝日

新聞元編集委員)が、こんな帯を無償で書いてくださった。

ほんものの議員がほんものの生き方をさらけだして、地方自治にどうかかわったかをそのまま記した貴重な記録集がこの本である。何年何月何日に、何を語り、何を提案したか、淡々と記された事実の重みが、事実ゆえに胸に迫る。

「女(おなご)のくせに議をいうな」

が今でも残る鹿児島市は女性議員数が全国最低。そこに初の革新系無所属として市民から推されて立ったみさ子さんは、その時四十二歳。小学生の一児を持つ無党派、無会派。飛び込んだ議会はミニ永田町、男社会そのもの。ベテラン議員からのイジメ、時には励ましにもあい、泣き、笑い、平和・環境の市民運動を通じて鍛えた知識欲と勘と粘りで、一つひとつ新しい場を築いていく。

議会での発言を読むと、その博識に驚

くが、毎月七十種類は読むというニコミと市民の集いで、の学習が情報源のこ  
と。だからこそ鋭い問題意識が随所に光  
る。「スタンスは常に市民」で貫かれてい  
るのが快い。

「議員報酬のほかに、議会に出席する  
と一日二万円の日当が出るのは納得でき  
ない。返上しよう」と呼びかけた一万円  
が、積みも積もつて八十四万円に。その  
淨財(?)で、この本が出来た。イラスト  
トで語る「議会の仕組み」。サビとユーモ  
アのあふれる「議会豆知識」。どれもおも  
しろくてためになる。

いま議場で活躍している人、これから  
立ちとうとする人、女性議員を支援する人  
今の政治を憤る人、ぜひ読んでください。  
元氣が出ます。勇氣が湧きます。(千)

(四六判三三〇ページ本体一八〇〇円)  
※〈あごろ〉会員には消費税・送料無料で  
お送りいたします。

---

## 本ものの地方分権・地方自治

浪江 虔著

BOCC出版部

---

ピラミッド型に積み上げられた無数の  
個人を、国という大きな手が、上からが  
つしりとつかんでいる。

冒頭、地方自治を象徴するイラストが  
「国がすべての個人を掌握」する自治の  
現状を端的に示す。

浪江さんの最後の著作になったこの本  
は、地方分権・地方自治の単なる解説書  
ではない。その基本となる人権、個の確  
立を、明確に語っており、地方自治の参  
考書として、これに優るものはないとき  
え思われる。

この本を貫いているのは「あの戦争を  
やめろ」と大衆行動をなし得ず、敗戦後  
民主主義のスタートにあたり「今こそ地  
方自治を」の声をあげ得なかった民衆の

一人としての「悔」と、戦争をやめる決  
断を遅延した国への「恨」である。「地方  
分権」は、法律や制度の手直しなどの次  
元の問題ではない。すべての主権者住民  
が力を合わせて、よこしまな権力を打ち  
負かす世紀の大運動である——と断じる  
筆者の気概が全編にみながっている。

地方分権を考えるテキストとして、浪  
江さんは、いくつかの自治体側提案の中  
から最もすぐれたものとして、神奈川の  
長洲知事らが提言した「地方分権推進要  
項試案」をまず掲げ、敗戦前の市制・町  
村制が天下の悪法であったことを示し  
て、機関委任事務制度の本質を解説、今  
後の道として「私がたどりついた住民運  
動の方法論」を述べ、「誰もが自治体運動  
家」と呼びかける。A5判、116ペー  
ジ、文字は大きく文章は明快。浪江さん  
の声が聞こえるような本だ。定価八百円。  
〈あごろ〉会員には送料無料で。(さ)

# 語りかけたいあなたへ 19

大里知子

## アメリカという国

あんなに新聞やテレビを賑わした、アメリカのクリントン大統領の不倫疑惑も、モニカ・ルインスキーさんと「不適切な関係にあった」と、大統領が連邦大陪審でようやく認めた。

この連邦大陪審で、大統領が証言したのは、クリントン大統領が初めてということだった。以前からなんとなく甘い感じがしていた、クリントン大統領のイメージだっただけに、「やっぱり、そうか」という思いが強かった。

私は、アメリカという国の政治的なことでは、あまり好きではないけれど、何か事が起こった時の対応の仕方が公平で、たとえ大統領であっても白黒をはっきりさせるところが、オープンでいかにもアメリカらしいと感心してしまった。

それにくらべて、わが国日本では自分に少しでも不利なことは、人も殺しかねない勢いでひた隠しに隠して、特に政治家には周囲の人たちも、それに応援しているかのように見える。

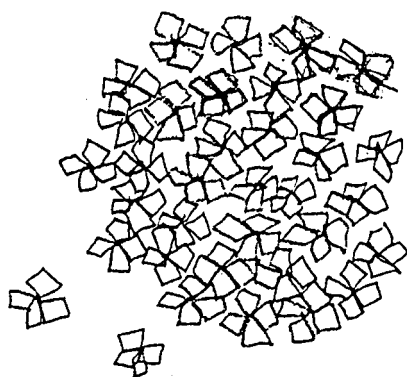
政治家の不倫問題など、ことのほか闇から闇へと葬り去られる日本と違い、自由な国アメリカがうかがえる。

このように、すべてのことが自由でオープンなアメリカだから、身体にハンディがある人たちにも、住みやすく、生きやすいのかもしれない。

アメリカを見てきた人に、身体の不自由な人のために、うまく出来ているから一度自分の目でたしかめてきた方がよいと言われている。

これからの私に、二十一年前のヨーロッパ旅行に次ぐアメリカへの旅が、はたして、待っていてくれるのだろうか。

(二九九八・一〇・一五)



# 女性に関する時間外及び休日労働並びに深夜業の規制の廃止を定めた 労基法改正部分の施行を延期する立法措置をもとめる意見書

一九九九年一月十四日 日本弁護士連合会

## 意見の趣旨

一九九七年六月十一日に成立した「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等のための労働省関係法律の整備に関する法律」(以下、「均等法関連整備法」という。)は、女性に対する時間外労働及び休日労働の規制並びに深夜業の原則禁止の条項を削除した。

この削除にあたっては、国会において労働時間短縮及び時間外労働等の制限をすべきとの附帯決議がなされたにも拘らず、そのような措置がなされていない状況であるので、上記女子保護規定の廃止を定めた部分の施行を延期する立法措置を早急に取るべきである。

## 意見の理由

1、均等法関連整備法では、男女雇用機会均等法の改正と労働基準法の女性に対する時間外・休日労働の規制並びに深夜

業の原則禁止の条項(いわゆる女子保護規定)を削除した。

この削除にあたっては、均等法関連整備法が成立した国会において、「国際公約ともいふべき年間総実労働一、八〇〇時間の早期達成に向けて、関係省庁間の連携・協力を一層強化し、政府が一体と成って労働時間短縮対策を総合的に推進すること。」「時間外労働の抑制について労使の認識を高めるよう努めつつ、中央労働基準審議会における時間外・休日労働等の在り方についての検討に際しては、諸外国の例など参考となる情報を提供し、時間外労働協定の適正化指針の実効性を高めるための方策等について、一九九九年四月から改正均等法が施行されることに留意し、速やかに実施されるよう、労使の意見を十分尊重しつつ、検討が行われるように努めること。」との附帯決議がなされた。

また、家庭責任を持つ男女労働者や深夜・休日労働についても、別添資料1に見られるように附帯決議がなされている。即ち、一九九九年四月一日には時間外労働、休日労働、深



夜業の女性に関する規制が廃止されることに関連し、男女共通の時間外労働、休日労働、深夜業についての規制が多くの国民の要望であり、その要望のあらわれが衆・参議院の附帯決議とされたのである。

2、しかるに一九九八年九月三十日に公布された「労働基準法の一部を改正する法律」では、時間外労働は、以下のよう規定されているに過ぎない。

労基法三六条一項には、従来通り時間外労働について労使協定によるものであることを定めている。そして、二項以下に次のような規定が新設された。

二、労働大臣は、労働時間の延長を適正なものとするため、前項の協定で定める労働時間の延長の限度その他の必要な事項について、労働者の福祉、時間外労働の動向その他の事情を考慮して基準を定めることができる。

三、第一項の協定をする使用者及び労働組合又は労働者の過半数を代表する者は、当該協定で労働時間の延長を定めるに当たり、当該協定の内容が前項の基準に適合したものとなるようにしなければならない。

四、行政官庁は、第二項の基準に関し、第一項の協定をする使用者及び労働組合又は労働者の過半数を代表する

者に対し、必要な助言及び指導を行なうことができる。

上記条文に示されるように、三六条二項は、残業時間の上限規制を労基法に定めることなく、労働大臣がその延長の限度等の基準を定めることができるとしている。そして、この労働大臣が定めることができる」とされている時間外労働の基準は、以下のように労働大臣の告示がなされた（平成十年十二月二十八日）。

まず、労働時間の一定期間の延長を定めるに当たっては、「一日を超え三か月内の期間及び一年間」と定め、その延長時間については、

一週間	一五時間	二週間	二七時間
四週間	四三時間	一か月	四五時間
二か月	八一時間	三か月	一二〇時間
一年間	三六〇時間		

とする。年間においては三六〇時間が限度とされているのである。

また、従来は女性に対して規制されていた一五〇時間を超えて残業をさせた場合には使用者に対し罰則規定が定められていたが、今回の新条文違反については、罰則規定はない。単に行政官庁の助言、指導があるのみである。しかも、上記

基準をこえた残業協定は違法とはいえず、無効とはならないのである。そして、上記基準をこえた残業協定については、政府は強力な行政指導を行う旨国会で答弁しているが、強制力はなく、上記基準をこえた残業命令については、それを拒否したことを理由として解雇や配転などが不当解雇あるいは権利濫用として民事上争うことができるということにとどまる。争いになってから救済されるのでは、労働者の権利やその労働条件は実質的に確保されない。このような協定では、時間外労働の上限規制の意味をもたないものといえる。

なお、育児、介護を行う女性労働者の時間外労働の基準を年一五〇時間をこえないものとするとの附則百一三三条を規定したが、休日労働には何らの規制もなく、深夜労働についても規制もない。但し、深夜労働については、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(以下、「育児・介護休業法」という。)一六条の二及び一六条の三によって、育児(小学校入学前の子を育てる男女労働者)及び要介護者を抱える男女労働者については、深夜勤務の免除請求権を認めている。

3、しかしながら、以上のような規定では、これまで当連合会が要望してきた立法提言とは余りにもかけ離れており、労

働者とその家族に与える影響は、深刻である。

当連合会は、これまで時間外労働の規制については、男女共通に一日二時間、一週六時間、年間一二〇時間の規制を、また休日労働・深夜労働については、男女共通に原則禁止の提言を行ってきた。

それは、なによりも、労働者が健康で男女ともに、家庭生活と職業上の生活を調和させた人間らしい生活と労働権の確立を実現するために必要な措置だからである。

わが国は、附帯決議にもあるとおり、年間総実労働時間一、八〇〇時間を国際公約として掲げてきた。しかし、それは実現されず、ようやく一九九七年に一、八九六時間になったところであり(労働省「毎月勤労統計調査」、一、八〇〇時間の実現にはほど遠い)。

また、労働者個人からの調査である総務庁統計局の「労働力調査」によると、一九九六年で二、二五七時間となっており、週平均六〇時間(年間三、一二〇時間)以上働く労働者の数は五七七万人(労働者総数の一〇・九%)に達する。うち男性は五〇二万人である。これらの人々は、経済企画庁経済研究所の報告「働き過ぎと健康障害」(一九九四年)でも超長時間労働者といわれた労働者であり、過労死の危険が高い。他方、

女性は、性別役割分担の解消がすすんでいないために、女性の負担は大きいものとなっている。とりわけ、夫婦共働きの場合、政府統計（総務庁「社会生活基本調査」）でも、平日の夫の家事労働時間がこの二十五年間一分もふえておらず、共働きの妻の生活時間のうち、勤務等時間（「仕事」時間と「家事関連」時間の合計時間）についてみると、夫よりも長く、共働きの妻の家事と仕事の負担が重くなっている。

一九九七年一月に実施された「労働者健康状況調査」の結果によれば、普段の仕事での身体の疲れの程度をみると、「とても疲れる」とする労働者の割合は二一・八％、「やや疲れる」は六〇・二％となっており、両者をあわせたものを「疲れる」とすると、七二・一〇％と約四分の三の労働者が疲れを感じている。前回調査と比較すると、「疲れる」とする労働者の割合が七・四ポイントも上昇しており、労働者の割合で見ると、男性で七〇・四％、女性で七四・八％となっており、女性の方が高くなっている。

現状でも、労働者の健康と、仕事と家庭の両立に困難が生じているのであり、年間三六〇時間という長時間の基準は、とりわけ女性労働者にとって激変であり、その影響ははかりしれない。

4、このような労働者の仕事と家事の実態をみるならば、時間外労働は、最低限、現在女性の上限となっている年間一五〇時間を男女共通の基準とすべきである。労働時間に関しては、当連合会は、人間の生活を規律する最も根本的なものであり、基本的人権に関わる問題として、これまで別添資料2に示すように意見書や決議、会長声明等で提言してきている。

とりわけ、一九九七年六月、均等法関連整備法が成立したのをうけて、「労基法の一部を改正する法律」により、それまで労基法に定められていた女性に対する時間外労働・休日労働の規制、深夜労働の禁止の削除に対しては、以下のような決議、会長声明、意見書を発表している。一九九七年十月二十三日に行われた人権擁護大会においては、「時間外・休日・深夜労働について男女共通の法的規制を求める決議」同年十二月十一日「今後の労働時間法制及び労働契約時間等法制の在り方」に関する建議に対する会長声明、一九九八年二月には「労働基準法の一部を改正する法律案」に対する意見書。一九九八年五月二十四日、第四十九回当連合会定期総会において、「労働法制の規制緩和に反対し、人間らしく働ける労働条件の整備を求める決議」。

これらの中で共通して指摘していたことは、労働時間は一

日一日の人間生活を律する基本的な問題であること、わが国の男性労働者に対しては、これまで労基法上時間外労働の上限規制がなく、そのため過労死という現象や家庭生活を破壊するさまざまな現象が生じていること等である。わが国は、

一九八一年ILOにおいて採択された家庭責任をもつ男女労働者の労働条件に関するILO一五六号条約を批准しており、この際採択された一六五号勧告では、「男女共に労働時間の短縮」が定められている。従つて、このような労働時間の短縮は、男女が共に家庭責任を担うためには是非とも必要であること等を指摘してきている。また、上記のような規制は、少なくとも労基法上に明文をもつて規定されること、そして従来の女性に対する規制のように、法の規制に違反した使用者に対しては、罰則規定を設けることが必要であることを述べてきた。

同様の意見は、当連合会のみならず多くの国民からの要望もあり、その要望を反映し、前記のような国会における附帯決議がなされたのである。

5、前述のように、均等法関連整備法が成立した国会の附帯決議では、政府が国際条約として年間総実労働時間一、八〇〇時間を掲げていることを明記している。この年間一、八〇〇

〇時間の達成のためには、一日八時間一週四十時間を前提として年間の時間外労働時間は百四十七時間であることを政府は明言している（第百四十回国会参議院労働委員会、一九九七年五月二十九日、伊藤庄平労働省労働基準局長（当時）答弁）。

また、附帯決議には、「諸外国の例など参考となる資料を提供し、時間外労働協定の適正化指針の実効性を高めるための方策等について、一九九九年四月から改正均等法が施行されることに留意し、速やかに実施されるよう、……」とされている。

ILOの調査によれば、百五十か国中一日についての時間外労働規制を定めているのは九十六か国存し、年間の規制を設けている国では百二十時間が十一か国で最も多く、最長でも三百二十時間（一か国）である。（ILO“Working Time Around The World”Conditions of Digest Vol.14,1995）。

なお、ドイツでは年間六十時間、フランスでは年間百三十三時間である（フランスでは本年、所定労働時間は週三十五時間とする法改正が行われた）。

前記附帯決議において、「諸外国の例など……」と述べているにも拘らず、以上のような時間外労働規制では附帯決議にも反することとなるう。

6、政府は、激変緩和措置として、育児・介護を必要とされ

る女性労働者に対してのみ当面年間百五十時間の規制とした（附則百三十三条）。しかし、通常の労働者にとつても、せめて時間外労働は年間百五十時間とされてしかるべきである。

このことは、前述のように、わが国の国際公約の実現にも近づくこととなる。激変を受けるのは、育児（小学校入学前迄）、介護を要する女性だけではない。そして、男女が共通に家庭責任をもち、人間らしい生活を営むためには、男女共通に時間外労働年間百五十時間の規制は必要である。

7、前述のように、当連合会はこれまで、労働時間の問題については、男女共通に一日二時間、一週六時間、年間百二十時間の規制を主張し、休日労働・深夜労働については、男女共通に原則禁止の提言を行ってきた。

しかし、一九九八年九月三十日、前述のような労働時間に関する法律が成立した。この法律による規制は、国会での整備法の審議経過及びそのときに採択された附帯決議に照らし、ても、男女共通規制としては全く不十分であり、このまま施行されるならば、労働者の健康及び仕事と家庭の両立が困難になることが危惧される。よって、当連合会としては、緊急に措置として、「均等法関連整備法」の労基法改正部分の女性に対する時間外労働及び休日労働の規制並びに深夜業の原則

禁止の廃止を定めた部分の施行を延期する立法措置をとるよう提言するものである。当連合会としては、前記の労働時間の提言を変更するものではない。施行を延期した上で、時間外労働等の上限について、年間百五十時間（さらに将来は百二十時間）の規制を法律上明記するよう改正する立法措置をとることを提言するものである。

なお、この点について、政府は、「均等法関連整備法」の附則一条の規定を改めることによって、労基法に定められていた女性保護規定の削除についての施行延期はできるものと答弁している（一九九七年九月十七日、第四百四十三回国会、参議院労働社会政策委員会）。

これまでも、たとえば、最近では、一九九七年に成立した「財政構造改革の推進に関する特別措置法」について、一九九八年十二月には、「別に法律で定める日までの間、その施行を停止することとする」という「財政構造改革の推進に関する特別措置法の停止に関する法律」が成立し（十二月十一日成立）、期限が定められることなく停止になっている。一旦施行された法律が、停止されているのであるから、施行になっていない法律の施行延期は可能である。

〔資料一〕

雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等のための労働省関係法律の整備に関する法律案に対する附帯決議

参議院労働委員会（一九九七（平成九）年六月十日）

政府は、次の事項について適切な措置を講ずるべきである。

1、男女双方に対する差別を禁止する「性差別禁止法」の実現を目指すこと。また、いわゆる「間接差別」について何が差別的取り扱いであるかを、引き続き検討すること。

2、時間外労働の抑制について労使の認識を高めるよう努めつつ、中央労働基準審議会における時間外・休日労働等の在り方についての検討に際しては、諸外国の例など参考となる情報を提供し、時間外労働協定の適正化指針の実効性を高めるための方策等について、平成十一年四月から改正均等法が施行されることに留意し、速やかに実施されるよう、労使の意見を十分尊重しつつ、検討が行われるように努めること。

3、国際公約ともいうべき年間総実労働一八〇〇時間の早期達成に向けて、関係省庁の連携・協力を一層強化し、政府が

一体となって労働時間短縮対策を総合的に推進すること。

4、中央労働基準審議会における時間外・休日労働等の在り方についての検討に際しては、女子保護規定の解決により、家庭責任を有する女性労働者が被ることとなる職業生活や労働条件の急激な変化を緩和するための適切な措置について、労使の意思を十分に尊重しつつ、検討が行われるように努めること。

5、家族的責任を有する男女労働者の時間外・休日労働及び深夜業については、その事情を配慮するよう事業主に対し指導等の措置を講ずるとともに、事業主が配慮すべき事情について、参考となる情報を十分に提供するよう努めること。

6、事業主が新たに女性労働者に深夜業をさせようとする場合は、労使間で十分な協議を行うとともに、深夜業に就業することに伴う個々の労働者の負担を軽減するための就業環境の整備に努めるよう指導を強化すること。

7、深夜業が労働者の健康及び家庭・社会生活に及ぼす影響について調査研究を進め、その実態把握に努めること。

8、法の実効性を高めるために、都道府県女性少年室長の「助言・指導・勧告」について明確な基準を定めるとともに、調停制度及び公表制度については、法の趣旨が十分生かされる

よう積極的な活用を図ること。

9、あらゆる分野の労働者に関するポジティブ・アクションの促進のための対策を強化するとともに、セクシュアル・ハラスメントに関しては、その原因を分析することにより実効性ある指針を策定し、行政指導を強化すること。

10、労働基準法の趣旨にのっとり、男女の賃金格差をもたらしている原因を分析し、速やかな改善方法の検討に行うこと。  
11、少子・高齢化の進展を踏まえ、看護休暇、保育・介護施策など職業生活と家庭生活の両立支援対策を充実強化すること。

12、均等法の円滑な施行を図るため、都道府県女性少年室の充実強化を図ること。

13、「パート労働法」及び指針の実効ある見直しを速やかに行うこと。

14、この法律の施行後適当な時期に、この法律の施行状況を勘案し、必要があると認められるときは、この法律の規定について検討を加え、その結果に基づいて必要な措置を講ずるものとする。

右決議する。

〔資料2〕

労働法制に関する日本弁護士連合会の  
決議・会長声明・意見書一覧

(一九九七～九八年)

◆時間外・休日・深夜労働について男女共通の法的規制を求める決議 (一九九七(平成九)年十月二十三日)

◆「今後の労働時間法制及び労働契約時間等法制の在り方」に関する建議に関する会長声明 (同年十二月十一日)

◆「労働基準法の一部を改正する法律案」に対する意見書

(一九九八(平成十)年二月二十三日)

◆労働法制の規制緩和に反対し、人間らしく働ける労働条件の整備を求める決議 (同年五月二十四日)

問い合わせ先 日本弁護士連合会

〒100-0013 千代田区霞が関二―1―3

TEL 03・3580・9841 (代)

## 浪江 虔さん

九十近いというのに背筋をピンと伸ばし、若い者よりも速く歩いていらした浪江さんが亡くなられた。1月28日、インフルエンザから肺炎に。あの世にも颯爽と急ぎ足で向かわれたような気がする。歯に衣着せぬ正論は、いつも厳密な理論の上に立っていた。同時に温かなヒューマニスト、フェミニスト。〈婦人民主クラブ〉や〈あごら〉のサポーターでもあった。

私財をはたいてつくられた私立鶴川図書館は、本棚もはしこもすべて手づくり、児童書のコーナーは遊びながら読書を樂しむ造り。三万五千冊の蔵書の大半は補強カバーがかけられていた。

ご自身も働いて浪江さんの夢を支え続けられた愛妻が病まれてからは、看護に心を尽くされた。久野収さんに続いて浪江さん、重厚長大な思想家・行動家が旅

立たれ、荒廃の日本に寒風が吹いている。

〔246号と241号〕

246号は、それぞれにうなずく、考  
えさせられる、運動の状況を知ることが  
できる記事。甲乙つけがたいので、今回  
は記事でなく「女から女たちへのメツ  
セージ」について書きます。個人的には  
「女（男）から、女と男たちへ」のメツ  
セージというほうがいいと思うのです  
が、『あごろ』の読者に「男」はいないの  
でしょうか？

それはともかくとして「年号」が入っている22通のうち、1999年が16通、平成11年が6通と27%を占めています。これが多いのか少ないのか……。女性差別ノ1、戦争ノ1。でも象徴天皇制はOK（したがって元号もOK）なんでしょか？ 世界的には2000年から21世紀なのか、2001年からのかと激論

されており、世紀末という歴史的ダイナミズム（まあこれも思い込みですが）から取り残された「天皇制文化推進派」という立場表明？ もしかすると、そんなに深い意味を考えなくて使っておられる方もいらっしゃるのかもしれませんが。

2月11日の祝日化、元号の法制化、君が代・日の丸の強制、叙勲制度の復活etc.、私たちの自由を奪う、戦前への逆コースとなっているもの一つ一つを改めてチェックしてほしいと思います。といっても「編集部が旗を振る」のではなく、問題に気づいた人が、紙面作りに努力していくことが大事なのかもしれません。元号については90年の144号「天皇の法的地位」でも一節ありますが、読者の意見という形で再度！（あと「夫婦別姓」「学校の男女混合名簿」「主人」「奥さん」という言葉の持つ差別性も）

241号「男女基本法を考えよう」の



P1「繰り返された長く熱い議論」とは、必ずしも直接基本法に焦点をあてたものではないと思いますが、〈あごろ〉の読者の皆さんの基本法に対する思いをぜひ募集して下さい。私の周りでは「共同参画」という「行政用語」に何ら疑問を持っていない「関心」を持っている女性たちでいっぱいです。私自身も「基本法」への意見を出すまでは、「男女共同参画社会」のPRに役かって、何の疑問も持たないで来たからです。（山形県 菅野真治）

〈編集部から〉

◆〈あごろ〉の男性会員の方は残念ながら現在16名。わずか2%弱と地方議会の女性議員比率4・7%より少数派にですが、菅野さんのようにモニターを引き受けて下さる方、投書やお電話を下さる方、創刊当時からずっと応援してくださる方など、心強い皆さんです。

◆「繰り返された長く熱い議論」は、もちろん、この五十余年の議論のことです。「男女共同参画基本法案」が国会へ提出

されるのも間近といわれています。菅野さんのご提案を受け、基本法へのご意見を募集します。締切は3月末日です。

### ネコの手下大募集



「あごろ」の事務局一同、あまりの忙しさに目が回っています。

月に二、三時間でも、週に二、三時間でも結構です。あなたのお力で、楽しい、読みやすい、元気の出る「あごろ」をつくってください。交通費全額支給。謝礼は「あごろ」またはBOC出版部の本です。

●取材●執筆

●著者交渉●原稿催促●レイアウト

●ワープロ入力●校正

●経理●資料整理●発送●雑用その他

地方でできる仕事（ワープロ印字、レイアウト、取材等）もあります。地方の集会やTOPICSもどしどし送ってください。ご連絡を！

### ◆モニター募集！

一県一人で昨年から募集中、まだ空きがあります。特典は99年度の会費免除。以上、お問い合わせはあごろ事務局へ。  
〒160-0002 新宿区新宿1・9・4 03・3354・3941/F  
AX9014

### 〈あごろ〉大ピンチですー

月刊「あごろ」は、皆さまのお心と、命を削るような支持に支えられ、今まで発行してまいりましたが、印刷費、編集費、発送費などが毎月収入を上回っています。赤字を埋め続けていた初期からの会員も体力が衰えました。このままでは隔月刊にでもしなければ続刊できない状況です。

◆〈あごろ〉の会費は月額七百円、年額八四〇〇円です。会費は前納制です。年会費をまだ納入されていない方は、恐れ入りますが郵便振替でご納入お願い申し

上げます。分割払いでも結構です。なお、二〇〇〇年以降の分もお支払いの方は、将来会費を値上げしても追加請求はいたしません。カンパももちろん大歓迎です。

郵便振替 001000-015264

加入者名 BOC あごら編集部

◆1人が1人、会員をふやしてください

【あごら】の名前は知っているけど、まだ読んでいない方も全国にはたくさんおられます。あなたの推薦文をつけて、お贈り先をお知らせください。その方に見本誌を無料でお贈りします（ご希望の号をお知らせください）。

◆「あごら」を支えている（BOC）へ  
自費出版物のご注文をどうぞ

一冊の本を出すには、数百万円が必要だと思います。いらっしゃる方が多いようです。書籍は建築物と同じで、目的と予算に応じて、どのようにでも設計できます。五十万円くらいからでも、どうぞご相談ください。ご希望なら、全国の書店で販売することもできます。

「企画はあるけれどもまだ形にはならない」「書きためた俳句や私歌、時、散文、論文がある」——こんな方も、お気軽にご相談を。

女性センターや女性企画室からのご相談も、お待ちしております。

#### 【編集後記】

（上越から）

◆お陰さまで講演会も盛況裡に終えることができ、参加者それぞれが満足感とともに、多くの課題を持ち帰ったようです。また、夜の交流会も近しくお話ができました。みな大変喜んでおりました。

斎藤さんのお人柄のお陰で、内容の濃い講演会と楽しい交流会をより盛り上げていただきました。誌面のご感想をお待ちしています。（青海町 鈴木勢子）

◆交流会に参加できず、ザンネン！と思っていたところ、テープほどの仕事が舞い込みました。ほどきながらゲラゲラ笑ったり、シーンとしたり。思わぬ「役

得」を楽しみました。入会して間もないのですが、（あごら）がグンと身近になりました。（糸魚川市 金子裕美子）

（東京から）

◆昨年6月のあごら240号「上越の女たち」発行以来、上越パワーは盛り上がっていますね。245号「フェミニズムとは限らないやさしさ、そして勁さ」の新潟、246号「99年は「地方と女性」の年」の長野と、信越地方の女性の活躍はすばらしいと思います。

統一地方選も間近。全国で立候補される（あごらめいと）の皆さん、次号にぜひメッセージをお寄せください。（礼）

◆インフルエンザがいつまでも治らず、絶不調でしたが、何か所か地方を歩いて元気を頂きました。「フェミニズムは衰退」などと朝日新聞に書かれましたが、発足後39年、創刊後27年、（あごら）は全国のあちこちに、しっかり根づいたという思いを深めています。（千）

# 女ひとり

## 地方議会に春一番

小川みさ子著

九六年四月、一口五百円のカンパの市民票を携え、鹿児島市議会へ乗り込んだ小川みさ子。たった一人無所属、無会派の航海はイジメの嵐。たとえば毎月の報酬のほかに議会に出ると一日一万円の日当がつくのはおかしい!と発言したとたん、保革一致のイヤガラセ。時には励ましも受け、環境派議員として、市民の健康で安全な生活を守るため日々奮闘。積み立てた日当八十四万円で自費出版した『女ひとり』シリーズ第2弾!統一地方選前に必読です。



四六版三〇〇ページ 定価 本体一八〇〇円(十税)

◆注文はハガキまたは電話・FAXで

(あごら) 会員の方には送料と税金をサービスします。

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四

TEL 03・3354・3941 FAX 03・3354・9014

BOC出版部

あごら 247号 <sup>ちほうせいじ</sup> 地方政治と女性 <sup>じょせい</sup> ●発行 1999年2月28日

●編集 あごら上越+あごら新宿

●発行所 あごら MINI 編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替 00100-0-5264

●定価 本体857円+税

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球  
その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球  
かけがえのないわたし  
かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう  
あなたも  
わたしも  
地球も

たった一度きりの人生だから  
思いきり  
のびやかに生きよう

だれもが だれをも  
ふみしだくことなく  
胸の底まで深く息をし  
ああ 生きててよかったねと  
ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば



9784893060907



1920036008575

ISBN4-89306-090-2

C0036 ¥857E

女による女の EOC 出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体857円+税